山ざくら

関東氷上郷友会

昭和五十年四月

第6号

文亀

渡辺紙工業株式会社

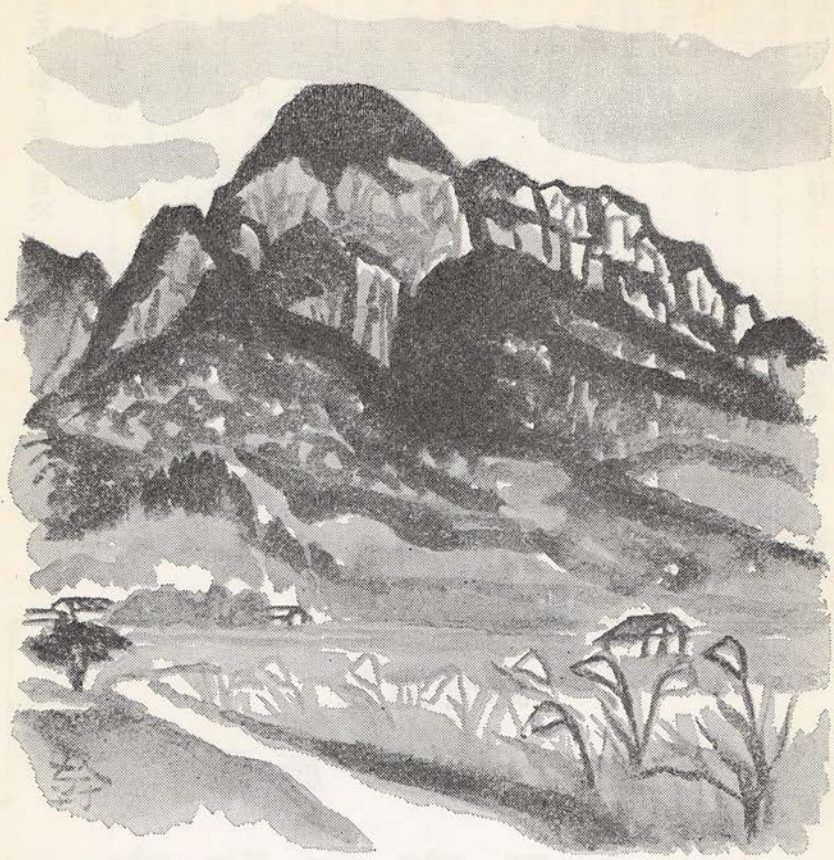
取締役会長　渡辺金三　　取締役社長　岡崎一二郎

本　社	大阪市城東区今福西３丁目２番24号 Tel　939—1281(代)
東京支店工場	東京都足立区中央本町５丁目22番12号 Tel　887—6711(代)
〃　関宿工場	千葉県東葛飾郡関宿町大字台町2192番 Tel　0471—96—1489(代)
東京支店営業所	東京都台東区柳橋２丁目15番４号〈関根ビル〉 Tel　861—2331(代)
名古屋支店工場	名古屋市西区又穂町３丁目13番地 Tel　521—8111(代)
大阪支店　工場	大阪市城東区今福西３丁目２番24号 Tel　939—1281(代)
九州支店　工場	福岡市博多区堅粕３—16—14 Tel　411—4237(代)

渡辺製袋株式会社

取締役会長　渡辺泰造　　取締役社長　渡辺金三

本　社	大阪市城東区今福西３丁目２番24号 Tel　939—1281(代)
東京支店	東京都台東区柳橋２丁目15番４号〈関根ビル〉 Tel　861—2331(代)
大阪支店	大阪市城東区今福西３丁目２番24号 Tel　939—1281(代)
藤岡工場	栃木県下都賀郡藤岡町内町4938番地 Tel　028262—3321(代)
兵庫工場	兵庫県加古郡稲美町蛸草1438—１番地 Tel　079495—0257，0401



頌　三尾城趾

山上　僅かに残る
　　砦の石垣
悲涙は宿る　戦国争乱

山下　拓ける大地
　　歴史をつづる
農民の血　涙のエネルギー

山容　行雲に托して
　　千姿万態
四季おりおり　農耕を啓示す

村びとは　山に祈って
　　土にいどむ
国家安泰　家内平安

（竹）

上図「三尾山」スケッチは、常岡幹彦氏（柏原）の、昨秋春日町での作品中の一葉。

山ざる　第6号　目次

すべて腹七分目で！……有田　喜一……4
手を携えて進もう……足立　三治……5
小谷正雄博士の業績……茅　誠司……5
（博士の経歴・藤原科学賞とは—）
イランからメキシコへ……西川　政一……8
アメリカでの印象……藤原　三郎……13
インドとパキスタンの珍客……藤原　岩市……17
イギリスで踊って……西崎　祥……21
タイ国の王様ゴルフ……伴仲　信次……22
乗馬のたのしみ……小林　剛……24
ふるさとからご挨拶……地元　町長……27
ふるさとあれこれ……27
アマゴ養殖の近況……平岩　慎吾……27
春日町の近況……山田　茂……28
地縁三代ばなし……江間　時彦……30
松茸が生えなくても……渡辺　金三……31
我が「ふるさと」随想……谷垣　正雄……31
故郷に心のふるさとを……前田　和市……33
神池寺縁起……畑　正義……36
座頭市のもてるわけ……須原　清……40

総合建築

設計　施工

株式会社　長富工務店

代表取締役　長富千代一（大路出身）

本　　社　東京都荒川区南千住5－9－8　電話（802）3721～4番
東京支店　東京都足立区青井町2－24－7　電話（840）4484～7番
船橋支店　船橋市海神3－16－1　電話（0474）（31）7178(代)

私の発病を経験に……荻野定一郎……40
俳句・和歌・詩……41
丹波栗……植村　章子……41
わが手で喰ううまさ……音無太美子……41
心田耕録……藤本　久一……42
信濃路にて……渡辺　久子……42
望郷之賦……松山　竹水……43
商店経営初歩必須要項（2）……村上　末吉……45
深尾女史逝く……49
須磨子さんを偲ぶ……佐々木盛雄……49
フルートとの出会い……森田淳二郎……51
郷友の長老・田誠さん……松山　幸逸……54
消息・お便り……55
同好会記録（ゴルフ・囲碁）……60
柏陵同窓会開催……61
四十九年度総会開く……62
財務担当に小谷氏……62
五十年初の役員会……62
会計報告・会費領収報告……63
本会役員……64
関東氷上郷友会会員名簿……65

図書出版 株式会社 二玄社 ★図書目録呈

代表取締役社長　渡辺隆男　（氷上町朝坂出身）

書跡名品叢刊　全200冊
法帖の決定版　各550～1300円

複製・東洋の名筆既刊9点
良寛ほか　各15000～20000円

古名硯　全5巻
原色版豪華図録　総150000円

名跡六体大字典・書源
藤原鶴来編　13000円

日本金石図録
神田喜一郎監修　18000円

書道技法講座　既刊27冊
青山杉雨ほか編　各1000円

書道講座　全8巻
西川　寧編　各1000円

新羅・高麗の仏像
中吉　功著　5000円

中国美術の研究
田中豊蔵著　2200円

東洋学文献叢説
神田喜一郎著　2300円

中国の印章
羅福頤著・安藤更生訳　1500円

月刊雑誌 CAR GRAPHIC
大型豪華版　10日発売・600円

世界の自動車　全60冊
世界初の自動車全集　各600円

世界名車全集　全8巻
レコード付原色版　各4000円

東京都千代田区神田神保町2—42／電話 東京263—6051～6054

すべて腹七分目で！

有田喜一
（氷上町谷村）

昨年は総需要抑制で金融も引締められ、大変な物価高、本当に苦しい年であったと存じます。どうか今年こそ、力をあわせてよい年にしたいと念じております。

インフレの克服こそ、今日わが国の最も大きい課題だと思います。今こそ真剣に日本をみつめ、世界の中の日本として、ことに資源小国の日本として、どのように対処してゆくか考えてゆかねばならぬときだと思います。幸い清潔で強力な三木・福田連立内閣ができましたので、今こそ真剣に物価の安定と経済の安定が期せられるものと確信していますし、また私が常に声を大にして申していました自民党の体質の改善も、この際強力に推進されてゆくことでしょう。

私は少年のころ、病身で常に医者と薬を離したことなく、今の私を見られる人にはとても想像もできない病弱な身体でありました。それが今日、御承知のとおり元気一杯かくしゃくとして、国のため、郷里のために働かせてもらっておりますので、私の健康法の秘訣は！　とよく人に聞かれます。

私は即座に、腹七分目と答えます。聞いた人はけげんな顔をするのですが、食べすぎ、飲みすぎで身体をこわす人はたくさんありますが小食で身体をこわす人は余りないように思います。あれほど戦時中や終戦直後の食糧難の時代でも、餓死した人は案外少なかったのです。食べ過ぎや飲み過ぎで病死する人よりはるかに少ないのに比べますと、やはり健康法は腹七分目が一番よいようです。

腹七分目は何も健康法ばかりではありません。処世上においても、また日常生活でも同じことがいえると思います。十の力しかないものが、十五や二十の力があるようにみせかけても、そんな見栄は一ぺんにふっ飛んでしまうでしょう。逆に十の力の人が七分位で押えることは、何となく謙譲の美徳がにじみ出て、人格的にも尊敬されます。また本人自身も心のゆとりがあって、ゆうようせまらざるものが感ぜられます。

私は事業の経営についても、この腹七分目ということが必要と思います。あまりにも背伸びした経営をしていると、好況のときはよいとしても、一旦不況に見舞われますとたちまち困ってしまうのです。が腹七分目の経営者は、いかなる不況にも持ちこたえ、好況時に備えるゆとりと自信とが生まれるものなのです。

古今東西、経済の過去をふり返っても、好況のあとには不況があり、不況を通過してまた好況と、この歴史をくり返しながら、経済の成長を遂げてきたのです。いつまでも高度成長の夢ばかり追っていると、とんでもない破綻に見舞われるでしょう。

今の高物価、不況を本年こそ克服しなければならぬと思います。それには政府の施策よろしきを得ることはもちろんですが、お互い高度成長の夢を捨てることが第一と思います。物を大切にし、節約につとめることも大事でしょう。すべて腹七分目の安定成長でゆかねばなら

ないと思います。

世界の中でも資源小国の日本です。いかにして物価を安定させ、経済を安定させてゆくか正念場の年といえると思います。お互いしっかりと手をたずさえて、希望のもとに落ち着きあるよき年たらしめようではありませんか。

（名誉会長・衆議院議員・元国務大臣）

手を携えて進もう

足立三治

（青　垣）

一九七〇年代は、私たちが未だかつて体験したことのない激動期が訪れてきたと、多くの識者は考えているようですが、私も全く同感です。原油産出国におけるオイルショックに端を発し、世界をあげて物価狂乱に見舞われ、社会生活の上に予期しなかった危機感を抱かせられています。

不況ムードが、すさまじい勢いで感じられるようになったこの現象を、私のように長い年輪を積み重ねた者は別として、若い人々はどのように消化しているでしょうか。現実をよく理解し、どのような方向に進んでいかなければならないか、深く考えて欲しいと思います。

しかもこの困難な情勢はまだ序の口で、さらに激しい変化が訪れることでしょう。全く一大転換の時代に突入したというべきで、これに対応するためには、国民一人一人が、原点に立ち帰らなくてはなりません。そして、それぞれの立場における配慮が望まれます。

郷土の皆さん、郷友会の皆さん、今こそ丹波人の使命観を発揮して、社会や他人に依頼心を起こさずに、ともに手を握りあって、この困難な時局を乗り越え、住みよい社会の建設に努力を積み重ねようではありませんか。

以上いささか平常感じております心境の一端を申し述べて、御挨拶といたします。

（会長・つるや産業社長）

小谷正雄博士の業績

『分子物理学および生物物理学の基礎的研究』

茅　誠司

四九年度藤原科学賞を受賞された小谷正雄博士の業績について、同賞選考委員長茅誠司博士の審査報告を掲げて研究内容を紹介することとする。さる十一月の郷友会総会席上の小谷先生のお話も、おおよそこの報告内容が骨子となっているからである。

（編集委員）

量子論を多体系に適用して、いろいろな現象を説明することは、物理学における主要な研究課題の一つであるが、そのうちの配位子場理論はここ十数年来、遷移金属化合物の物性や、その錯体の化学を解明するのに輝やかしい成功を収めてきた。このような配位子場理論の発展の基礎を築いたのが小谷氏である。

遷移金属化合物あるいは錯体の特徴は、それが結晶あるいは錯体となった状態でも遷移金属元素の電子が閉殻をつくらず、不完全殻をもっていることである。このことが現象面では色とか、磁性などに現われる遷移金属化合物特有の性質の根本的原因となっており、そしてまたこのことが遷移金属イオンをとりまく周囲の対称性が高いことと相俟って、配位子場理論の方法という特殊な理論的取扱いを要求してきたのである。

配位子場理論は遷移金属イオンの化合物、たとえば金属錯体とか、磁性絶縁体、あるいは遷移金属イオンを不純物として含む固体の磁気的、光学的、化学的性質を理解するための基礎理論であり、その理論には大きく分けて二つの立場がある。その一つは自由な遷移金属イオン電子状態が結晶に入ったことによって摂動をうけるという弱い結晶場近似の立場であり、主として欧米のグループによって発展させられてきた。他の一つが小谷氏の強い結晶場近似の立場である。そこでは結晶中で遷移金属イオンとまわりのイオンが強く結合して一つの分子をつくっているように考え、この分子のポテンシャル場であるいわゆる『配位子場』中で電子の振舞いを記述しようとする。

小谷氏は結晶中では遷移金属イオンとまわりのイオンの間にある種の化学結合が存在するという考え方に立って、この強い結晶場近似の方法を発展させ、一九四九年に提出された論文 On the magnetic moment of magnetic ions において遷移金属錯体の常磁性的性質を予言する一般論を導いた。

遷移金属化合物または錯体中では多くの場合、遷移金属イオンMは六個のイオンまたは中性分子Xによって正八面体型に囲まれているが、小谷氏は正八面体の対称性をも（MX6）型錯体についてX電子数の各値に対し電子状態を求め、次にこの基底状態に対する磁場の影響を調べこれをもとに帯磁率の温度変化を与える理論式を導き、その特徴を予言した。

この一般論に刺激されて、常磁性共鳴吸収の方法を用いて錯体の磁気的性質を解明しようとする試みが数多くなされ、その結果結晶中では遷移金属イオンとまわりのイオンの間に強い共有結合性の存在することが明かになったのである。

この事実に基いて強い結晶場近似で分子軌道論の立場に立って共有結合性をとり入れたのが今日の配位子場理論であり、まさに今日の発展は一九四九年の小谷氏の理論に負っているといっても過言ではない。同氏の理論は金属錯体の基底状態に関する一般論であったがその後励起状態を与える一般論も同氏の指導の下に小谷門下の研究グループによって発展された。

遷移金属化合物は、ルビー、アレクサンドライト、サファイア等の宝石でよく知られているように美しい色を呈するが、このような結晶の美しい色が配位子場理論で導かれるエネルギー準位間の遷移によることが励起状態に関する一般論で定量的に明かにされたわけである。このように小谷氏及び同氏の指導する研究グループによって導かれた

遷移金属錯体の電子状態を与えるエネルギー・ダイアグラムは結晶の美しい色を理解するのに本質的な役割を演じ、その業績は世界各国の研究者によって高く評価されている。

今日では小谷氏の指導の下に発展した配位子場理論の活躍する分野は磁性物理学、光物性物理学、電機光学、レーザー学に関係する電子工学など極めて多岐にわたっているが、ここで強調しておきたいことは、同氏による配位子場理論の生物物理学への応用である。生物物理学は広い研究対象をもっているが、その中での氏の業績は生体物性と呼ばれる分野におけるヘム蛋白質についての研究である。

理論の面では氏の最も得意とする、配位子場理論の研究をヘム蛋白質に存在する重要な活性中心であるヘム鉄に応用し、電子磁気共鳴や常磁性磁化率の測定結果をみごとに説明した。氏はこの理論に基いて各種の実験を示唆し、かつヘム蛋白質の研究の将来性を示した。またこの理論はヘム蛋白質のメスバウアー効果や核磁気共鳴の研究の基礎にもなっている。さらにヘム蛋白のうちで最も広くかつ詳しく研究されているヘモグロビンでは、その生理機能の重要な要素であるアロステリック効果が問題になっていたが、氏はこれをヘモグロビンの構造変化に基いて統計熱力学的に説明する理論を発表し、現在も精力的に研究を続行されている。

内外を問わず非常に多くの研究者がヘム蛋白質（ヘモグロビン、ミオグロビン、チトクロームなど）やヘム酵素（チトクローム、オキシダーゼ、ペルオキシダーゼ、トリプトファンピロラーゼなど）を生化学的及び生物物理学的に研究しているが、その機能に重要な関係を持っている部分が鉄であるために、氏のヘム鉄の電子状態に関する論文と総説は上記の研究分野では必ず引用されるバイブルとなっている。

また、同氏の論文や総説では難解な文章やいい廻しを用いることなく現象の本質を明解に説明してあるため、専門外の研究者にもよく理解出来るので有名である。

小谷氏は大阪大学基礎工学部においてヘム蛋白質の理論及び実験のグループを組織し、これを海外の研究グループ（英国ケンブリッジ大学ペルツのグループ及び米国ペンシルバニア大学のヨネタニグループ）との共同研究体制へと発展させた。

このように分子の電子論から配位子場理論へと発展し、更にヘモグロビンを始めとする一連のヘム蛋白質、ヘム酵素の研究に飛躍的な進歩をもたらした氏の業績は国の内外を問わず指導的な役割を果し、わが国が世界に誇るべきものである。

小谷博士経歴

小谷さんは明治三九年一月柏原町に生まる。昭和四年東京大学物理学科卒業、一八年理学博士、四一年東大名誉教授、四五年七月東京理科大学長就任、今日に至る。

昭和四年卒業以来東大工学部講師、助教授、教授を経て、三二年東大理学部長、その間、宮

内府御用掛、京大教授を兼ねた。三五年再び教授となり、大阪大学基礎工学部教授も併任、四四年三月停年退職、同七月四代目東京理科大学長となる。日本学士院会員、日本学術会議委員、その他各種国際学会委員も兼ね、多忙な活躍を続けておられる。

なお、二三年には「電磁管及び立体回路の理論」で日本学士院賞、「分子構造の量子力学的理論」で東洋レーヨン科学技術賞を、さらに四九年六月「分子物理学及び生物物理学の基礎的研究」によって、自然科学界最高の賞「藤原賞」の栄誉を受けた。

藤原科学賞とは——

元王子製紙社長で第二次大戦中は商工大臣や軍需大臣をつとめた藤原銀次郎氏の寄附によって設けられた科学振興賞で、翁が昭和三十四年、満九十歳の記念に私財一億円を投じて設立したもの。

この賞は科学技術の進歩発展に貢献した科学技術者を毎年一名ずつ選んで、基金から得られる利息のうち五〇〇万円を贈られるもので、対象となるものは、物理学、化学を初め、医学、電気、採鉱冶金など自然科学の全部門に及んでおり、わが国当面の急務とされている科学技術振興に役立たせようとして設けられている。

従来は一名の授賞者であったが、本年は二名で、富田恒男医学博士とともに小谷博士が選ばれた。

（写真は小谷博士）

《一水漫筆Ⅲ》

イランからメキシコへ

西川政一
（市島）

一、人文字と沙漠

イランのテヘラン行きは三回目であったが、私にとっては「沙漠の中の古都」という永い間の観念が、今回金の力で打ちのめされた形の訪問であった。いわゆるオイルダラーが溢れるばかりのイラン国、悪くいえば金にあかして造った「総合運動場」が至れり尽せりの立派なものであり、その周辺のいろいろな施設、即ちプール、水泳場、バスケット場、ピンポン場、バレーボール専用施設等々がそれぞれ冷暖房の設備を持ち、他を圧した感が深かった。

腐れ縁というか、私は過去半世紀に亘りバレーボールに関係して来たが、その責任から、今度のアジア競技大会 Asian Games に、病後にもかかわらず出掛けたのであって、開会式当日、上述の総合運動場に於て「人文字」がまことに美事に演出せられ、人々の脳裡に永く残るものであることを目撃した。しかもその人文字は日本人のある大学の先生が殆んど一年間かかって教えたもので、正面のロイヤルボックスの前を、その国の選手が通るとき、向う側の広いスタンド一面にその国名（英字）と国旗が美事に作り出されるという仕組で、私も始め

て見る壮観であった。

だがこんな郊外の沙漠で、一体誰がその費された金に見合うだけの利用をするだろうか。希わくは末永く多数の市民が利用し、心身共に健全になって貰いたいものである。

因に、テヘランでは日本バレーボール男女とも金メダルを獲得してくれた。

序でに一言したいのはメキシコの北部に多い沙漠が、私のメキシコ旅行中にしばしばテヘランを思い起させたこと、また、両国とも古代文化の遺跡がいまなお豊富で、少なからず我々の旅情を慰めてくれたことである。

二、大統領フォードさんと語る

昨年の秋米国の新大統領フォードさん来日の時、日本政府は、その接待の一環として、日本古来のスポーツ（?）即ち柔剣道、薙刀、槍などを東京武道館でやってみせることにした。

元来フォードさんはアメリカン・フットボールの選手であって、スポーツの大の愛好者だが、彼はぜひバレーボールの練習を見たいというので、我々の協会は、せんだってメキシコで金メダルを取った日立を中心とするチームに、ネットなしでいわゆる回転レシーブなどをみせながら親しく説明した。

アメリカで発明（?）されながら、ソ連を中心とする東欧諸国、日本を中心とする東洋諸国に、非常に発達しておりながら、肝心のアメリカが弱いとは何故であろうか。一九七六年にはカナダで世界オリンピックをやるから、この時アメリカの真価を発揮してもらいたい——など一席も二席も弁じた。

運動家のフォードさんは、目を輝かせながら、日立チームの実演を、実に興深く見入っておられた。

あの広大なアメリカは、組織の点ではなかなかやっているが、競技の点では、あまり強いチームが出ておらぬ現状で、再来年のオリンピックを、大いに期待しておる私であるとも附言しておいた。

（もう二〇年も以前のこと、九人制の早稲田チームが、はじめてアメリカに行き、九人制を紹介しながら、六人制を勉強して来たが、これを実際に見たアメリカ協会長フライヤームードさんが、感動のあまり、日本の天皇陛下に手紙をかき送ったという面白い国のアメリカである。）

（拙著「世界は一つ」二〇〇頁参照）

三、メキシコの印象

＊

四十九年十月十二日から二十八日まで、メキシコで世界バレーボール男女選手権大会が行われ、これに先だち九、十の二日間正式なI.F. Conference（国際会議）、そしてその前二日間に予備交渉がやはりメキシコシティで行われた。

今回は、我々夫妻に招待状が来たので、大手を振って参加したのであるが、病後の身体調整のために、バンクーバーで二日、サンフランシスコで一日（ここ金門橋ゴールデンゲートブリッジのほとりには前のＩＯＣ（世界オリンピック委員会）の会長ブランデージさんの有名な博物館があり、その陳列方法がいわゆる東洋的なそれとかなり異ったユニークなものなので、ぜひとも一度みてくれよとのブランデージ氏のかねてのお話に従い、特に一日を費したのである）次に二四〇〇メートルあるという高地メキシコシティに乗込んだ。

＊

今度の試合は、メキシコ国内六カ所で予選をし、その結果、決勝リーグを行う仕組で（東京で決勝戦をやる場合、九州、北海道、阪神地方および東北などで予選をするようなもの）であったので、私もメキシコシティに於ける会議がすんでから男子の予選地、メキシコとアメリカの国境に近いテイファナに激励を兼ねて乗込んだ。首都からここまで飛行機で三時間、時差を入れて実に四時間という、いわば田舎に近いところである。

テイファナの予選は別にしたためるとして、そこの飛行場にはわが社のロスアンゼルス支店から松尾君が車を持って来てくれていたので大助かりであった。

私等がはるばる日本から来てくれたというので、その地の競技責任者が、心からのもてなしをしてくれ、お蔭で私は日本の選手を大いに激励し得たが、試合のない昼間に、「ちょっと遠乗りをするので、ネクタイなしだ」というと、彼はある日本選手の赤いタイを貸してくれて、ローア・カリフォルニアのＶＢ協会会長ガルシヤ君に会ってくれと言う。私は借りたネクタイをつけて彼のホテルに行って会い、ひととおり挨拶を交わし、乞わるるままに日本の盛況などを話した。

我々はその夜米国領サンディエゴに車をとばし、夕食をとった。彼地へ行くには国境でビザの関係から十五分ほどおくれたくらいの簡単さであったが、私の持論「世界は一つ」に鑑み、此の処置は誠に我が意を得たりと思った。実際、メキシコのペソよりもアメリカのドルの方が尊重されるくらいで、アメリカ色の濃厚な処であった。

私がその昔メキシコに興味をもち初めたのは、エンセナダという所を紹介されてからである。この地は古来の漁港で車でテイファナから一時間半位、海岸線に立派なドライブウエイができており、私等はその沿線から見る海岸の美しさに魅せられ心ゆくばかりエンジョイした。

テイファナからアメリカとの国境にそって、一望千里のドライブウエイ、或いは岩また岩の嶮阻な道を走ると、やがてローア・カリフォルニア州の首都メヒカリ市に着くが、ここには州知事が常駐し、この州のバレーボール協会長であって、いろいろ世話をやいてくれて居た。

＊

テイファナの予選では、大した相手もなく簡単に此の予選区第一位となり、第二の予選地トルカに出たが、そこには強敵ルーマニアが頑張っている。私は十月二十日その対戦のためにメキシコシティからドライブ（約一時間半）して行ったが、その日は特別に寒く、トルカでは四方の山々に白雪が積り、これを見て、相当の高地へ来ているのだという実感が湧いた。

スタディアムはあまり立派ではなかったが、私等には特設のよい席

をくれた。観衆はギッシリつまっており、この競技に市民がいかに関心を深めているかが判った。聞けば新日鉄のチームも半年前頃当地へ遠征して来たことがあるという。

ルーマニアとは苦戦の結果、漸く勝ったが、一時はどうなることかと心配した。

＊

一方日本女子チームであるが、予選地区としてうまくモンテレーのクジを引き当て、割合に楽な試合を進めた。

ここには既に三十年以上住みついている人がいて、日章旗を振って盛んに応援してくれ、後半には私の横の席にやって来ていろいろ人懐かしげに話していた。また日立の先輩生沼さんその他十人ばかりが、これまた一生懸命の応援をしていてくれた。

モンテレーはメキシコ第三の都会で製鉄工場、ガラス、プラスチックの工場等が多々あり相当大きな工業都市で、周囲にいろいろな面白い形の山々がそびえ、永く我々の記憶に残る土地である。

ここでなみいる世界各国のチームを打ちとった後、グアダラハラに乗込み、優勝リーグで最後にソビエトと雌雄を決することになった。その後を今静かに顧みると、決戦当日は日本ができすぎて、ソビエトのできが悪すぎた感があり、三―〇で簡単に勝ち得たことはウソのようなマコトで、ソ連のギビ監督も帰国の暁には首を切られるのではないかというような気がした。日本としては全く東京オリンピック以来の痛快事であり、山田監督も今日までの辛苦が充分に酬いられ、今やまことに「大きな顔」ができ、また雌伏十年の飯田主将も婚期を犠牲にして健闘してくれた甲斐があったというべきであろう。他の選手諸君と共に万歳万歳、万々歳である。

＊

日本男子軍がトルカでルーマニアに巧みに勝ってメキシコへ乗込んで来たので、その健闘振りを喜んだものであるが、選手の止宿しているホテルがおそくまで騒がしく、数人の選手が熟眠できなかったということは、まことに気の毒なことであった。折角ここまで強敵相手に来て、ソ連との戦にワンポイントまで押詰めながら勝を譲ったことは、いくら考えてもあきらめ切れぬところである。

その時私は、日露戦争のことを思い出し、また日本の選手は「大切なもの」を持っているかとさえ歎かれたのであった。牛や豚でスタミナをつけている東欧諸国の選手の真似をしておれば、こんな情ないこともあり得るのではなかろうか。すべからく日本独得の戦法を持って進むべし。彼等は日本のやり方、即ち一挙手一投足を八ミリまたはstill で撮影し、研究に研究を重ねているのだ。ソ連の女子が負けたのも、秘密主義でその練習を他にみせなかった結果ではなかろうか。

＊

最後のポーランド戦、そこにも彼等の驚くべきスタミナがあった。スタミナとスタミナの激突では太刀打ちもむずかしかろう。

モントリオールの世界オリンピックに向って、日本独特の戦法を編み出すことが必要なゆえんである。二人や三人のスタミナの強い選手に頼ってばかりいては駄目である。「技量伯仲で運のよさが左右する」とか、「すべては天祐に俟つ」とか、いい方、考え方はいろいろあろうが、運命を拓き天祐を迎え得るのは、自らがすべての努力を尽して後、いい得ることである。

試合は何としても勝たねばならぬ。

＊

以上バレーボールのことを中心に書いたが、私は「日本メキシコ協会」も引受けているので、責任上、以下少し一般的な観光記も書いてみよう。

いう迄もなくメキシコは「明日の国」また「太陽と緑の国」でもある。あの明るく美しい国、面積も日本の約五倍あり、自然も文化もバラエティに富んだ国である。夏も冬も、北から南へ、温暖の地多くして全く万人向きといえる。

北部の砂漠、中部のサボテン高原、南部の緑濃いジャングル、また高原に散在する常夏の盆地、その間に新旧の文化、テオテイワカンヤやマヤ文化の遺跡など我々を楽しませてくれるものが数限りなくある。

メキシコの市中で名高いもの——まず我々の居たレフォルマ通り、これを中心として、民族博物館、森のような動植物園、数限りない広場や公園、ならびに銅像、塑像、ソカロ広場とアラメダ公園を中心とする官公庁のビル、四十三階の超高層ラテンアメリカ塔、民族舞踊の行われる国定芸術院、さらに一番の繁華街と称せられるマデロ通りやファレス通りもこの附近にあり、外国人ツーリストが常に右往左往して居る。

この他、大学都市周辺、地下鉄の種々相、国技たる闘牛場、風変りなピラミッドの数々、何年かかってもやろうとするアシタマニヤーナの国メキシコの表徴メヒコホテル、近年とみに有名になった日本料理のサントリーレストラン（エチエベリア大統領が日本料理を非常に好み、しばしば来店されたが、あまり繁くなって誤解を受けるので最近は料理人を官邸に招じ日本料理をエンジョイするという）多数の日本人を接待し得る日墨会館（日本人の結婚式等にも利用せられ、過日田中前首相の歓迎式パーティもここで行われた。日本式建築）。

四、アカプルコ

アカプルコは、メキシコ太平洋岸の良港で、半ばはメキシコ海軍の根拠地、半ばは海水浴場として開放せられ、美の極致とさえいわれているが、あまりに人工がはいりすぎて、悪くいえば俗化しておる感じである。かの有名な飛込み（クエブラダ）は見る人を喜ばすことこの上なく、背後の大小、また色とりどりの別荘など意表をつくものが多く、世界的な遊楽地として名を得たゆえんであろう。

この海岸の景勝の地に支倉常長の等身大の銅像が立ち、西方をにらんで（日本人よ大いに海外に雄飛せよ）といわんばかりの姿をみせていた。この像は、宮城県知事および仙台市長などが、伊達正宗の命を受けて、このアカプルコからメキシコを横断し、（約四〇〇年前）イタリーのバチカン法王のもとに行ったのを記念して、昨年の今頃建立したのである。私も日墨協会長として、応分の寄附をなし得たことを幸いと思っておる。

飛行場の近所にも、ホテルは建ち並びゴルフコースもあるが、前述のように、いささか俗化しているのではないかと考えられた。

五、コスメル島

コスメル島はユカタン半島の東端にあり、今、非常に開発されて、

立派な海水浴場を兼ねたレジャーポイントになっている。
飛行機でメキシコシティから約一時間、大きさは大体日本の伊豆大島くらいと思われ、ニューヨークのショッピングセンターがここへ移って来たかと思われるくらい立派な海岸通りもできている。
温度は平均30°Cくらいか。スイミングの道具一式を買いこんで、海水浴の準備をした。ホテルも一室一室が個別に利用できて、全くノンビリしたものである。透きとおった紺碧の海、アノ色アノ光！
海岸沿いのこととて、夕食後は海面を吹き渡ってくる涼しい風に充分な涼をとった。ほど近い水族館には種々美しい色彩の魚類、さては、竜宮行きの浦島太郎を思わせる大きな長さ一メートル近くの亀がゆうゆうと泳いでおり、全く浮世ばなれの気持を味った。
この島は自由地帯であり、無税のために、シティでは売っておらぬビスケット、チョコレートその他が非常に廉価であった。きれいにペーブされた道をドライブして北端に行くと、立派なホテルがそびえ立ち、そのアーケードでは、殆んどあらゆるメキシコの郷土品が売られていた。
帰りはあいにく時雨模様になったが、小さな亀がノソノソと匐い出て愛想を添えてくれた。

六、クエルナバカ

ここはメキシコシティから約70キロの所にある衛星都市の一つで、高さも一五メートル見当、気候は湿暖で、別荘地としても申し分なく、多数のメキシコ富裕階級が広やかな美しい別荘を建て、また多数のリタイアド・アメリカンが住みついていて、その数三万以上といわれていた。
有名な日本の記念館もあり、支倉常長がアカプルコからこの地を通過してメキシコシティへ乗り込んだといわれており、その頃の記念建築物の多いのにおどろいた。
ランチのために立ち寄ったメキシコ風のレストランは美しい芝生の庭があり、孔雀がゆうゆうと歩き、天然色の麗わしい小鳥が鳴き囀ずるという悠長さで、時のたつのも忘れてしまった。
かの有名な松本三四郎さんの邸もメキシコシティから本拠をここに移して、花卉、野菜、植物類の優れたものを栽培し、現地のメキシコ・日本協会の会長として、ずいぶん尽力されておる。私はその邸で御夫妻の歓待を受けたが、今後の日墨親善にも努力を誓われて非常な心強さを感じた。
序でながら当地は気候がよい上に労働者の思想が穏健なので、日産自動車が工場を作って居る。

（写真は外国旅行中の西川さん夫妻）

アメリカでの印象

藤原三郎
（氷上）

ある日突然の訪米話

ある日突然というが、私のアメリカ行きはまさにある日突然、しか

も晴天のへきれきのように決った。

デスクの上の電話がけたたましく鳴る。いつものように会合の連絡か、あるいは陳情かなと思って受話器をとると「ハロー」続いて「ミスターフジハラ」という。私のところに英語で話す電話など殆どかかって来たことはない。

突然のことなので「イエス」と答えられない。まごまごしていると、先方は人が変わり「こちらは米大使館の一等書記官ですが、毎年政界・官界から一人ずつ人物交流としてアメリカに行ってもらっている。あなたは秘書会の会長をやっておられ、ミスターキイチ・アリタと共にこの道二十年という経歴から、米大使館では今年はあなたにアメリカをご視察願うことになった。ご承諾願えるか」とたどたどしい日本語で話すのである。

ふって沸いた話に、即座に返事もできず「しばらく時間を欲しい」といい、とたんにひらめいたのは「誰かがいたずらをしているな！」と直感したので「冗談はやめろ、あなたは誰か、よく聞く声だが……」といったところ、先方は「冗談ではない。こちらはアメリカ大使館の大使の代理である」という。それでも半信半疑で電話を切ったが、考えれば考えるほど不思議である。なぜ衆参両院公設・私設を含めて約三千名近い秘書がいるのに、私に白羽の矢が当ったのか？

ともかく、こうしてアメリカ行きが決ったのだが、その後アメリカ大使館で打合せのとき分ったことは、これは国務省の招待であること、飛行機、宿泊、食事、通訳、先方で病気にかかったときの医療費一切アメリカ政府が責任を持つということであった。全く面はゆい感じだ。しかも日本からゆくのは政治・行政面では私一人である。他にも言論文化界なども一名ずつ招かれているようだが、ゆく日が違うので私の一人旅になるようで、いささか心細い感がないこともなかった。

しかし、ゆくとなると、多少は英語も勉強しておかねばならないと殊勝な心がけになるが、日常の生活や仕事に追われて、それもままにならない。エイままよ、二年前経企庁の秘書官をしているとき、有田大臣の御供で日韓経済閣僚会議にソウルに行ったとき、また友人三人で東南アジアを旅行したとき、そんなに英語で困ったことはない。まあなんとかなるだろう、となかば捨てばち的な気分であった。

こうして昨年十月二十三日羽田から飛び立って、十一月二十三日無事帰国した。

アメリカ各地の様子はたくさん本も出ており、行った方も多いと思うので、三十三日間の視察招待旅行中、感じたこと、日本との相違点に的をしぼって、風景など割愛させて戴くことにする。

政治面では進んでいる

大統領の権限は大変なものである。日本の総理大臣の権限より或いは大きいかもしれない。しかも日本の総理大臣は国会が開かれると、否応なしに国会に引張り出され、野党の毒舌を交えた攻撃にじっとがまんせねばならぬ。シトシトピッチャンの大五郎スタイルである。しかもちょっとでも前任者、或いは前言と違ったことをいえば、直ちにあげ足をとられ、国会中断という破目になる。ことに国会開会中はそのことだけにきゅうきゅうさせられる。

ところがアメリカの大統領は議会から呼出しがあっても、大統領がゆきたくなければ拒否でき、もっぱら行政面に専念できるようになっ

ており、またさすが民主主義の国、紳士の国というか、国会では人のとさか（鶏のとさか）を逆なでするような言葉を与野党ともに絶対にいわない。

アメリカは各議員がそれぞれ立法する立前になっているので、各議員はスタッフの強化をはかっており、政策担当とか、国会担当とか、選挙担当とかに分れている。これらは日本と同じように国会議事堂の周辺に、やはり議員会館のようなものがあって、そこで議員の議会活動を助けている。ちょうど私が訪問したときは中間選挙の真最中であったが、街を歩いてもマイクで喧しくがなり立てる日本の選挙と違い、ポスターがわずかに貼ってある程度の、極めて静かな選挙風景であった。

しかし、どうして立候補者が選挙民にPRするのかという私の疑問は、次の言葉で打消された。

まず立候補を決意した人は、その選挙地盤の共和党員か、民主党員の二千名以上の推薦を受け、それがなければ立候補ができない。従ってこの推薦をたくさんの人より受けた人は、当選ラインに近づいているということを意味する。日本の政党と違って、しっかり国民の間に根をはった政党であるから、別にマイクで喧しく不特定の人の票を集めに廻らなくてもよいというわけである。

日本の政党の公認制度など、有権者不在的なところがあるが、この点から考えると改める必要がありそうだ。

厳しい政治資金法

やはりアメリカにも政治資金規正法がある。しかも日本のそれよりも厳しい。絶対に企業及び組合からは政治資金を受けてはいけない。政治資金はあくまで個人献金に限られており、有権者から五十ドル、一〇〇ドルといったような献金を受け、それがポスター代やパンフレット代になる。それも今まではいくら集めてもよかったが、本年一月より、最高十万ドル以上集めてはいけないことになった。

私が訪れたニューヨークのある上院議員の選挙事務所では、当選間違いなし（推薦者が二万人を突破しており、反対候補は五千人の推薦者しか集められなかった）というので、その国会議員のスタッフの弁護士さんが、政府に提出する会計報告を盛んに計算していた。なるほど、これでは選挙違反もないと思い、羨しく思った。

百万都市で市議僅か八名

さきにものべたように、私が訪問したときは中間選挙の最中だったので、選挙運動や資金の集め方などを実際面で生々しくみたのであるが、たとえば州議会、知事の選挙などでも、これはよいなと思ったことがいくつもある。

ご承知のように中間選挙は上下両院の国会議員はもちろん、州議会

の上下議員、知事、副知事、地方裁判所長官、会計責任者、市長、市議その他、いろいろな選挙が、一挙に行われるのだが、感心したのはニューオリンズの場合、百万都市であるのに市議が八名、また州知事、副知事のほか裁判所長官、会計まで選挙するという制度である。

日本のように、人口一万足らずの町村に、議員が二十名以上もいるところはないし、三割自治といわれ、殆んど国費の補助でまかなっている地方自治体が、知事や県議の選出だけで、あとは地方長官任せという所はない。知事が交際費一つも自由に使えないように、会計責任者を有権者が選ぶなど、これでは汚職など起したくても起しようがないようになっている。

また、これだけは日本でも取り上げたいと思ったことは、州議会でも国会でも、初議会のとき、行政官議員全部が『私達はアメリカ合衆国と国民のため、忠誠をもって政治・行政を行い、誘惑に負けて金銭の授受や、やましいことは一切しない』と片手をあげて宣誓するところなど、形式的といえばそれまでだが、おごそかな感に打たれた。

国際的に地位高い日系人

大きい都市や、太平洋海岸の都市には必ずといってよいほど、日米市民協会というのがある。ハワイの別府州議会議長にも直接話を聞いたが、この人の場合もそうであるように、大なり小なり、日系一世、二世はアメリカ社会では苦労をしているようだ。一世は、日本を発つとき大金を持ってアメリカに渡った人は皆無といってよいくらいで、白人黒人にまじって日雇労働をしながら、二世に自分達の夢を托し、二世はまたそれに応えるべく、苦労をしながらアメリカ社会の中にとけ込んで行った人が多い。

総じて一世は日本人という感覚から抜け切らぬ人がたくさんおり、二世は日本人でなくアメリカ人だという人が多いようだ。三世になると逆に祖父母の地、日本をなつかしがる人が多いとのことだ。

しかしある地方で、ある日本人が「ジャップ」といわれたと、日米市民協会にかけ込む人も未だにあるようで、ワシントンの日米市民協会の会長が、私に「あなたは政府の高官にこれからも出合われるだろうが、ジャップとだけはいわぬように行政指導をしてくれるよう依頼してほしい」と頼まれた。

だが、あちこちの日本人に聞いた話だが、日本の国際的な地位向上とともに、日本人にジャップと呼ぶアメリカ人は殆どないようで、アメリカにおける日本人は祖国日本が今後ますます発展するよう願っていた。祖国日本の発展は、この日系米人の誇りを高くし、アメリカにおける日本人の位置づけを高くすることに他ならないと思った。

名誉大使の称号を受ける

フォード大統領からサインペンをもらったり、民主・共和両党本部へ行ったり、ニューヨークでは国連本部、市議会、市役所、ウォール街、バッファローでは下院議員で共和党から立候補していたケンプさん（当選）の後援演説をやったり、アトランターでは飛行場の騒音公害、フロリダのケープケネディ基地の見学や、ミス・フロリダとの夕食会、ニューオリンズでは食糧事情と港湾の視察、オクラホマでは石油、軽飛行機製造工場の見学、流通機構や家庭訪問、商工会見学、ラスベガス、グランドキャニオンを経て、サンフランシスコの漁業見

物、日系人の活躍ぶりなどみて三十三日のアメリカ旅行を終えた。

この間、レストランで食事の注文を間違って変なものが出てきたり、ニューオリンズではわざわざ市議会が私のために本会議を開いて名誉市民の鍵と称号をくれたり、またオクラホマでも州議会を知事が開いてくれて、議員（上院）や五百名からの傍聴人の中で私に名誉大使の鍵と称号をくれたりした。

政治、行政だけでなく、いろいろな方面にわたって本当によい勉強をさせてもらった。この間、ニューオリンズでストリップ劇場の前でロをあいて見ていたら、傍らの通訳ゴーハムさんが（註・この通訳のゴーハムさんは国務省がつけてくれたアメリカ人で、海軍大学出身の元大佐で、ワシントンから最後まで私に付添ってくれた）あなたはこんなものをみてはいけないといって、心ゆくまでみせてくれなかったことなど、未練話もあるがこれらはまたの機会に譲り、この辺でひとまず筆をおくこととする。

（有田喜一衆議院議員秘書）

（写真はワシントン国会議事堂前の筆者）

インドとパキスタンの珍客

藤原岩市
（多可郡）

この秋、私はインドとパキスタンから二方の珍客を迎えた。昭和十七年シンガポール陥落以来、私の呼びかけに共鳴して、インド国民軍に参加し、後にインド独立の師父、チャンドラ・ボース氏に率いられ、日本軍と共に、ビルマ、イムパール（インド領）の激戦を戦った連隊長である。インドの友は、G・Sディロン大佐、パキスタンの友は西北国境のソ連領、中共領（新疆）、アフガニスタンの三国に近い元チトラル王国（四国程の広さ）の王子、ブルハヌディン大佐である。

この二氏は、共に終戦直後の秋から、英国がインドの都デリーで開廷した軍事法廷の被告となった方である。インド人が二度と再び英帝国に反逆を企まないよう、見せしめに処断しようとしたのである。だが結果は裏目に出た。ガンジー、ネールに率いられた四億五千万インド人烈火の反撃に遇って、裁判は打ち切られ、全員釈放、インドの独立を認めざるを得ない羽目になった。いわばインド独立の直接の起爆剤になった志士達である。私はその被告側証人として喚問され、五カ月レッドフォートの法廷に立ち会った仲である。

二氏来日の動機

まずディロン大佐は、四十八年一月、戦後三十年来宿願のイムパール戦域巡拝の実現に骨を折ってくれた戦友である。この戦域には、四万の日本軍将兵と、七千のインド国民軍将兵が、草むすままに放置されているところである。この地域の少数民族が独立を要求して反抗を続けているから、外国人の入国を許さなかったのである。私はインドの招待を受け五氏の団長として参った。ディロン大佐は、前後二週間つきっきりで日印合同巡拝の案内に当たり、共に涙に暮れながら、激戦地を巡拝した。インド独立の人柱になっていただいた勇士を、このままにしておいては、インド国民として申し訳がないと、氏は大地に

ブルハヌディン大佐と筆者

額をすりつけて泣いた。

私達一行は大佐のこの美しく温い真情に泣かされた。そして大佐を日本に招いて「日本の心」を満喫してもらおうということで招いた次第である。

次にブルハヌディン大佐は、チトラル王国という七〇〇〇メートルを超える前人未踏の峻嶺がそそり立つヒンズクジー山脈の南嚴に拡がる美しい緑の秘境の国の人である（一一月二〇日のNHK放送、および同日朝日朝刊記事参照）。

一九六八年頃から、日本の山岳連盟のパーティーや京都大学の探険隊がチトラル王国に出かけるようになった。もちろん各国の登山隊も行く。

日本のパーティーを、あたかも肉親を迎えるように歓迎し、自宅に宿を提供し、万端の面倒を無料奉仕しつづけているのが同氏なのである。一年半も同家に居候になった者もいる。

その理由は、インドやパキスタン、そしてアジアの国々の独立は大東亜戦争における日本軍の支援、協力のお蔭である。しかもチトラルの住民（一六万）は日本人と同じ蒙古系の民族で血縁である。ご恩返しに、日本の方々の世話をするのは、私の義務であり、誇りであるという。そして日本の若い登山家に毎夜のように、大東亜戦争間の日印協力の思い出を語って聞かせるとのこと。多くの方は、戦後の方で、その話がよく呑み込めないが、その素晴しい親日、敬日と親切さには恐れ入るばかり。そこで、ヒンズクジー山脈の登山家と探険隊で結成するヒンズクジーカラコラム協会（二五〇名）が恩返しにお招きしようということになった次第。この招きを受諾するに当って、私の意向を確かめて欲しいと申し添えてきた信義の篤さである。

氏は、二回にわたる私のパキスタンの首都イスラマバード訪問の際チトラルの奥から三日がかりで、豹の皮や民族服の土産をたずさえて会いに来てくれたほどの真情の人である。

＊

さて両氏の滞在は、前者は二六日、後者は一四日、日本の各地を案内し、拙宅にも泊っていただいた。その間、私は両氏の各地での公私のスピーチや行動を通じて、その美しい真情と人間像について数々の感銘、感動を受けることができた。

その幾つかを列挙申し上げたい。

㈠ インド、パキスタンの独立は、日本の敗戦、日本軍将兵の血の犠牲の上に、かちえたのだ。否、アジア各国、ひいてはアフリカ大陸各民族の解放と独立もそのお蔭だ。

㈡ 日本は大東亜戦争中はチャンドラ・ボース氏の率いたインド国民の組織と反英独立戦争を支援、協力してくれた。そして終戦後、デリーの軍事法廷では再び磯田中将、松本俊一氏を初め、同志の方々（藤原を含む）を証人として派遣し、自分達の反英法廷闘争を支援し

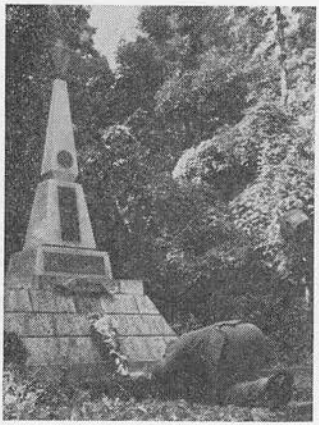
てくれた。その裁判がインド独立の直接の動因となった。

一方、インドは、パール判事を極東裁判に派遣して、連合国全判事検事の中で唯一人、日本の無罪を主張して譲らなかった。そして日本に対する一切の賠償権を放棄し、独自に平和条約を交わした。日印両国はこの深い縁に結ばれているのだ。

㈢ 戦後三〇年ぶりに、日本の戦友の温い歓迎を受け、感謝と感慨で胸一杯だ。それにつけても、祖国に生きて帰れなかった八〇％の日印両軍戦友と遺族の上に思い至ると、胸をしめつけられるようだ。

私達の国の独立の人柱になっていただいた日本軍勇士の遺骨収集に協力して、この護国神社や靖国神社や遺族の許に帰っていただくことは、インド国民の義務だ。自分も最善をつくしたい。

㈣ ディロン大佐は日本到着の翌日、ビルマのイラワジ河畔で死闘を共にした二一四連隊の戦友に迎えられて、宇都宮の護国神社に参拝した。大安吉日とあって境内は一〇幾組の結婚式で賑っていた。境内に建立されている二一四連隊戦死者の慰霊碑に花輪を供え、礼拝していた大佐は、哀悼の感慨極まったか、大地に伏し、額をすりつけて、滂沱たる涙にくれた。並いる戦友はもちろん、眺めていた多くの参拝者も、この厳かな大佐の戦友愛に泣かされた。



慰霊碑に額づくディロン大佐

㈤ 靖国神社で

両氏は、日を異にして私と数名の戦友に導かれて靖国神社に昇殿参拝した。これは両氏訪日の第一の願いであった。

宮司の案内で玉串を捧げ、二拝二拍手一拝の敬けんな礼拝を行い、戦友の遺品館を食い入るように克明に拝観した。終始眼をうるませ、度々、溜息をつくように「武士道」「サムライ・スピリット」の讃嘆する言葉を繰返しつづけた。

御供物や資料は持ち帰って、郷里の社会館に納めたい。そして郷民を啓蒙したいとのことであった。

特に、私が靖国神社はマッカーサー指令によって、国家の護持を受けられなくなったままだと説明すると、色をなして米国を非難し、また日本の当局者の怠慢をいぶかしがった。「日本精神はどうなったのだ」と嘆息したのが私の心を抉った。

㈥ 明治神宮、同記念館、同壁画館参拝、参観

両氏共に、探い感動に浸りながら、敬けん熱心に参拝、参観し、しばしば質問と述懐を繰り返した。

その言動を通じて、両氏共に幼い頃（現在六一歳）から日露戦争の日本の大勝についていかに深刻に語り聞かされ、民族魂を覚醒されたかと思い知らされた。

日本の若い世代がその意義を見失い、否定しつつある現況と思い合わせて、恥しい思いがした。大東亜戦争の史観についても、全く同様の傾向である。

㈦　伊勢神宮にて

ディロン大佐を案内して一一月二日、外宮に特別参拝を許され、御神楽を頂戴した。

五十鈴川の霊域は、錦繡の秋色で紺べきの青空に輝いていた。

大佐は、神殿奥深く進むにつれて「日本の心の故里に導かれるようだ。日本伝統の心を感得できた」といって、佇立、瞑目、讃嘆した。

また、五十鈴川の神橋に立って、清流と秋色の山に映えて、へんぽんと旭日に輝く日章旗を仰いで、立ち去りかねる風情で、折柄参宮に続々と詰めかける国民の敬けんな光景と見比べつつ、大佐は私と片山氏の肩をたたいて放った次の一言は鋭く私の心を射た。

「これこそいかなる原爆・砲爆弾も打ち砕くこともできない不壊の日本の力だ」と。

㈧　宇都宮郊外の篤農家を訪ねて

ディロン氏は戦友に案内されて、富貴沢家を訪れた。ハウス野菜と稲作の篤農家であった。大佐は、機械化された近代農法にも感嘆したが、それよりも、両親夫婦と若い長男夫婦、妹さんが円満に、前者は稲作を、後者はハウス野菜栽培の篤農に徹し、特に令息がこの業に人生の真の生き甲斐を覚えている、正月早々にはこの家に初孫が産ぶ声を挙げると聞いて、感嘆し、祝福の言葉を繰り返した。

そしていわく、「農は国造りの基本だ」「農を尊び、農を大切にする国民とその政府を持つ国は強い」「男子は有事に当っては銃を執って祖国を守り、平時は食糧生産に励むことが男児の本領であるべきだ。インドでは特に大切だ。自分はその信念に基いて農園の経営に身を捧げている」と。

世界的食糧危機の急と、六〇％近く食糧を海外に依存しつつ、農政を疎かにする政府と、農業の勤労を嫌い、食糧を濫費し、国の安全を忘れた日本国民に対する頂門の一針と覚えた。

㈨　世界救世教の箱根、熱海の聖地を参観して

ディロン大佐は、世界救世教の配慮で、箱根と熱海の聖地を拝観し、お茶の接待や、お庭、美術館を参観させていただいた。日本の信仰を感得してもらうためだった。

大佐は、地上天国の具現そのものの聖地を拝観し、清冽で森厳、壮大な聖地に溢れる霊感に痛く感動し、岩森次長さんに、

「立ち去りかねる思いだ。この霊域でいつまでも冥想に耽りたい思いだ」と語り、満腔の感激を表わしていた。

また、茶席の接待では「極度の簡素と静と寂の美に感じ入った」と話していた。

「日本の心」の真髄に触れ得たのであろう。

㈩　礼節の正しさ

両大佐ともに、一九四二年シンガポール陥落の際、インド国民軍に参加したのであるが、当時、私は少佐で、両氏は大尉であった。

両大佐とも、神社、仏閣の参拝や各地の会合の席に案内する際、かたくなに私を先に立ててやまなかった。この度は大佐がゲスト、私は案内人と申しても、私を父だ、兄だと言い張って聞き入れなかった。もともと、軍人とは申しながら、その礼節には恐れ入った。

㈪　日本の総括的印象

各地とも、神社、仏閣、聖地、史蹟等の参拝・参観が多く、戦友や厚情の方々に迎えられることが多かった関係もあるが、清潔、簡素、

優雅、山柴水明と、日本の人々の勤勉と親切さに対する感嘆であった。そして日印両民族に共通する生活文化と感情の発見であった。

一つ不服を漏らしたことは、街に見る青年の長髪と、服装態度の女性化であった。

そして、全国民が挙って、憬仰、敬拝し得る伊勢神宮や明治神宮、靖国神社を持つ日本国民は何にもかえられぬ倖せだと羨ましがった。

複数民族と宗教相剋の宿業に悩む両氏の祖国にとっては、もっともなことである。日本の国民は、世界稀有というべき、一民族、一言語、一文化の家族国家の有難さを忘れてはなるまい。

最後に羽田を去る時残した言葉は「心は心に通い、心は心を呼ぶ、私はもう日本の方と一心一体だ」と。

イギリスで踊って

西崎　祥

（柏　原）

昨年はイスラエルへ日本民族舞踊団を引率して国際民族芸能祭に参加（会誌第五号参照）して、国際文化の交流にお手伝いいたしました。その関係もあって、本年は元衆議院議長船田中氏が会長を引き受けられた財団法人日本民族芸能国際交流協会が設立されまして、その最初の事業として、イギリスのビリンガムで開催された国際民族芸能祭に、一行三十八名とともに、さる八月七日出発しました。

私が三年前はじめて参加したフランスのコンフランでも同様の催しがあり、三日間公演を行ったのち、イギリスに渡りました。今回は前年のイスラエルでの演し物のほか広い会場に向くような男女の群舞を多く用意して出演したため、参加十二カ国（アメリカ、ソビエト、フランス、イギリス、スペイン、イタリア、ベルギー、ルーマニア、ハンガリー、コンゴ、日本）中、もっとも好評を博し、無事大役を果して、八月二十八日帰国しました。今回の大会でいちばん印象に残っているのは、イギリスの文部大臣H・ジェンキンス氏が歓迎の挨拶で「古い伝統と日常生活に深く根をおろした芸術はわれわれの遺産であり、良質の民族芸能を保存する必要性がある」と強調されたことでした。

私もこれで前後四回海外公演に参加したことになりますが、今後も頑張る覚悟です。

（旧姓　粕谷京子）

イギリスの少年ダンサーと筆者

古典研究公演催す

西崎祥さんは別記のごとくわが国の民族芸能を通じて、国際文化の

交流に貢献されていますが、このたび、西崎磨利さんと共同して、第一回古典研究会を本年一月十二日、日本橋の三越劇場で開いた。

第一部（一時）第二部（四時）に分れ、第一部では門下生のおさらい形式で、常磐津「松島」外八番を、第二部では長唄「外記猿」（西崎祥）「浅妻船」（西崎磨利）「黒髪」（若村喜久特出）大喜利に「高砂丹前」（二人共演）という古典長唄を揃えて踊りまくり、大変好評を博した。この会には、郷友会有志ら多数激励にかけつけ拍手を送っていた。

（M）

タイ国の王様ゴルフ

伴仲信次（春日）

千葉の袖ヶ浦カントリークラブには、袖ヶ浦コースと新袖コースとがあり、一応チャンピオンコースとして定評がある。

この袖ヶ浦とタイ国のパタヤにあるサイアムカントリークラブとは、タイ国の皇太后の縁で姉妹クラブを結んだ。その結成記念にサイアムで日・タイ親善ゴルフをやろうということになった。

秋風が肌にしみ初める十一月十九日、袖ヶ浦のメンバー九十四名がゴルフツアーを組んで出かけていったのである。

タイ国のゴルフ場は、バンコク周辺に五、六カ所あるが、陸・海・空軍が管理しているのと、観光協会やスポーツクラブが運営しているコースもあって、プレーするにも制限があるらしい。その点サイアムの方はメンバーコースだから好評のようである。

首都バンコクからシャム湾沿いにハイウエイを東南に向ってドライブすること二時間半、およそ五〇キロほどいくと、リゾートビーチで有名なパタヤ海岸に着く。この地域はフランス人が別荘地として開発したところで、ヤシとマンゴ樹の繁る南国情緒豊かな風景が展開し、海岸は海水浴場になっており、いろいろなレジャー施設もある。日本の海水浴場のような人で埋まる混雑さとは異なり、ごく少数の人たちが思い思いのバカンスをのんびり楽しんでいる風景はまことに羨ましい。

ホテルも高層のが四つ五つ建っているが、何れも敷地を広くとって、プールや噴水などを設けて屋外での食事やパーティも楽しめる。われわれ一行の泊ったホテルでは、年に一度催す灯籠流しの日であったから、プールサイドでは楽団が演奏し、民族舞踊が次ぎ次ぎに繰り出す一方では、さまざまに趣向をこらした灯籠がプール狭しと浮べられた。料理はバイキング方式で食べ放題、まことにおおらかで、楽しい一夜を過すことができた。

さて、サイアムカントリークラブは、このホテルからヤシとマンゴの繁る原野を十キロほど行った「竜の山」と呼ばれる丘の麓に、十八ホール、七一四〇ヤード、パー七二のコースが展開している。一見小さなコースのように見えたが、ラウンドしてみると、距離もたっぷりあって、私のようなビギナーには打てども打てどもピンに至らず、スコアーのまとまらぬコースであった。そのうえ芝は現地の芝を改良し

たというタイ高麗とかで、グリーンに乗ってからがむずかしく、いたずらにストロークを重ねねばならなかった。

日本の炎天下でのプレーを想像して乗り込んだ私たちだが、初日は薄曇りでさほどの暑さでもなくホッとした。ところが二日目になると朝から一点の雲もなく、空はあくまで青く澄み切って絶好の南方日和であった。私はこの炎天ではハーフも廻らぬうちにブッ倒れるかもしれないと思って日傘を買った。そこには十数人のキャディがたむろしていたので、このキャディに傘を差しかけて貰おうと思いついて、その中の一番美しいのに目をつけて指名した。彼女、あぶれずにすんだ喜びもあったか、私に合掌して早速傘をさしかけて付いて来てくれた。キャディと傘さしの二人の若いタイ美人を従えての、まことに優雅なゴルフである。私は王様の気分とはこんなものかな、とご満悦であったが、同行の連中、うらやましがることしきりである。

ここでキャディについて書いておきたい。初日に一行はバス二台でクラブに着いたら花火を打ちあげての大歓迎。そこには百人近いキャディがバックをつけたカートを持って一列に並んでいた壮観さ。おそらくこんな状景は一生お目にかかれないだろうと思われる見事さであった。しかもこれらのキャディ嬢、いずれも十三歳から二十三、四歳までのピチピチ女性である。

キャディフィー（料金）は一ラウンド四五〇円、チップ一五〇円計六〇〇円で、日本よりはるかに安い。

タイ国人は日本人よりやや小さく、平均してヤセ型が多い。女性は明眸皓歯、素直な感じを受ける。私はささやかな品物を用意していたので与えると、合掌して受けてくれた。素朴で好感が持てた。小さな日タイ親善のタネを蒔いたといい気分になった。

ここでちょっとしたハプニングに触れておこう。十五番コースにかかったころ、ポツポツ雨が降り出したと思ったら、急に激しい雨となった。いわゆるスコールである。話には聞いていたが、その猛烈さには全く驚いてしまった。スコールは二十分くらいで去ったから、再びスタートになったが、コースは至るところ一面の水溜りができ、ひどい所はスネのあたりまである始末。そこでパートナーと相談の結果、素裸足になって、ズボンの裾をあげて、日本ではお目にかかれぬ珍プレーをやってのけた。ルール・エチケットのやかましいゴルフにハダシとは？（写真参照）

私たちは最後に近い組だったので遅れてクラブハウスに着くと、大勢の仲間が「あァ帰ったよ、帰ったよ」と一斉に騒ぎ立てている。何のことかと聞くと、われわれの組の誰かがブルースネークに噛まれて、救急車が血清をとり寄せて現場に向ったとのことである。

ブルースネークは文字通り青色の毒蛇で、噛まれると二時間くらいで死亡するという猛毒をもっている。特にスコールのあとにはよく現

われるとのことであるが、どうしてこんなデマが飛んだか判らないが、その話を聞いて一瞬背筋にヒヤッとするものが走っていた。

その後一行はバンコックに戻り、理事長の私邸でご馳走になったが、もう一度出かけて王様のゴルフに浸ってみたいと、いまでも思い出しては微苦笑している。

（春日建設社長）

乗馬のたのしみ

小林　剛
（市　島）

私は大正十年三月生まれだから、そろそろ五十四歳になる。それでいて毎週お天気さえよければ、いや雨天でも私の行く馬事公苑には覆（おおい）馬場があるから、雨の日でも風の日でも、土曜か日曜にはよほどの差支えのないかぎり馬をたのしんでいる。馬をたのしむといっても馬券を買うのではなくて、正真正銘自分で乗馬をやっているのである。妻やわが子たちは「年よりの冷水」などと冷やかし半分に酷評を加えているようだが、本人は一向に意に介しない。もちろんそんな年齢とは本人は思っていないし、また乗馬なら二十歳や三十歳の人にひけをとらない自信があるからである。

動物も数多くいるが、その中で、馬ほど利口な動物はいないと思っている。非常に鋭敏で、人の気持を的確に感じ取る。人が警戒心をもって近よると、果して馬は身構える。無心の子供には、馬は全然警戒したりせずに、おとなしくその愛撫を受けるのである。このように利口だから、人と馬との約束が成り立ち、高等馬術のような人馬一体の名技も生まれてくるのである。

馬との長い因縁

私と馬との因縁は長い。昭和十四年に盛岡高農（今の岩手大学農学部）に入学して以来であるから、そのまま計算すると三十五年になるが、途中ブランクがあるから実質は十年程度である。当時盛岡高農は創立も古く、質実剛健の学風と少数精鋭の実力者養成で名門校とされ、また私の入った獣医学科はその卒業生の実力が社会的に高く評価されていた。馬術は獣医学科は正科に準じ、特別故障のある学生以外は、一年生は全員乗馬部に入部を強制された。そして、馬体の手入、装鞍、飼付け、寝わらの掃除に到るまで、先輩のきびしい鞭のしごきを受けた。乗馬長靴とキュロット（乗馬ズボン）でカッコウだけは一人前でも、馬に乗せられるとザマはない。最初から鐙（あぶみ）外して騎座（きざ、鞍を両脚で固定する）の特訓が、朝早くから毎日続くと、お尻の皮もむけるし、全身打撲のように身体がいたんだが、一週間もすれば身体は馴れてくる。しかし一学期は新入学生には辛い期間であ

ったことに間違いない。

陸奥（みちのく）の春は遅い。四月には雪の降る日も続く盛岡でも、五月になると桜は一斉に咲く、その頃になると、何とか鞍にしがみついて駈足（かけあし）ぐらいできるようになった新入生は、学校近傍の桜の名所、高松の池の堤まで外乗につれ出して貰う。桜吹雪の中を駒にまたがって通過する優越感はひとしおである。今でも当時の状景を思い出す。

荒馬で乗馬の特訓

馬は毎日一時間練習すれば、一週間たてば何とか先頭馬について行けるようになる。そして一年生も一ヵ月たって学校になれた頃には、一人で騎乗できるようになり、低い障害物の通過ぐらいはできるようになる。獣医学科の学生は、一年の夏休みは夏期実習ということで、

乗馬姿の筆者

岩手山麓の農林省の種馬育成所（現在の岩手種畜牧場）で乗馬の特訓を受ける慣例になっていた。まるまると肥った種馬候補が各人に一頭割り当てられる。この荒馬で午前と午後二回の馬運動でみっちりしごかれる。馬がはねて地面に叩きつけられることは至極当り前だが、若いということは偉大である。別に負傷もしないし苦にもならない。そして尻の皮が二回もむけて一ヵ月のコースを終了する頃には、種馬育成所の二マイル馬場で競馬の真似事もできるし、不整地馬場の障害物を連続して平気で跳越することもできて、馬のホラも吹けるような水準に達するのである。

盛岡の三年間の何にましてもの印象は馬との出会いである。東の馬に西の牛と言われた当時、およそ馬には縁のない柏原盆地に生まれ育った私が、東北の原野で馬を駈るなど、思いもよらぬことではあった。それが現在の私の人格形成にも大いにあずかっている乗馬にしたしむことになった。人の奇しき運命（さだめ）に神意を感じる。

「馬キチ」の誘いで再会

そして大東亜戦争、学徒出陣の第二回生で姫路の輜重連隊に入隊後のある日、私は最初の乗馬訓練の日、経験者として中隊長の前で裸馬を乗りまわして見せた。爾後、私の乗馬訓練は免除という特待を受けることになって面目をほどこしたが、芸が身を助ける諺が地でいったようなことであった。従って私には初年兵の苦労はあまり記憶にない。ビルマの戦野で愛馬に生き別れて終戦となり、復員後農林省に就職して二十有余年、乗馬する機会にめぐまれることはなかった。五年ほど前、私の課に転勤してきたKという係長がいわゆる「馬キチ」で

私を世田谷の馬事公苑に誘ったのが、乗馬再会のきっかけをつくって今日に及んでいる。

昔とったきねづかで、馬に乗って何とか人についてゆけはしたが、二十年以上のブランクは身体の構造も固くなっていたし、乗馬のカンがにぶっていた。何より驚いたのは馬が早いものであるということの再認識であった。それに、学生時代の馬は輓馬型の太いたくましい馬が多かったが、戦後の乗馬はスマートな軽種（サラブレッドやアラブなどの競走用馬）が主体で、カンもよいが極めて鋭敏で、それにスピードは抜群である。本当の乗馬時代が来ていると感じた。

それから三十年前の乗馬能力を呼び起すのに約二年はかかったように思う。

乗馬の秘訣は鞍の数

私はよく初心者から聞かれる。どうすれば馬に上手になれるかと。私の答は、要するに鞍の数であるという先輩から引き継いだ簡単な言葉しか出て来ない。他人より常に一鞍でも多く乗るという態度にしくはないのである。そうしている中に、ある日突然にうまくなる。突然自信がつくのである。そしてまたある期間壁にぶつかって、進歩の遅いことを嘆く日々が続くが、飽かずに努力を続けると、またある日突然に悟る。そしてぐっと上手になる。これが乗馬の秘訣であると私は答えることにしている。もちろんこの間、次第に馬と対話ができるようにならねばならない。馬の肢蹄を自分で洗い、十分手入れをしている中に、馬の気持を知るようになる。他人の手入れした馬を乗るだけでは、とてもうまくなれる道理はないと信じている。

私は今、農林省乗馬会のO・Bとして馬事公苑で乗馬練習する機会を得ている。ここは東京オリンピック大会の馬術競技も行われた所で、日本における主要な馬術選手権はここで行われるだけの施設が整っている。日中は世田谷区民の公園として開放されている。もしお天気の良い土曜日の午後に馬事公苑を訪ねられると、そのどこかに私の乗馬姿を見ることができるはずである。

障害飛越しの醍醐味

私はこの他、武蔵野市の馬術連盟にも属している。四官庁、社会人、武蔵野市、都民などなど、春秋の好季節に馬術大会が挙行される。この試合に出る時の、その都度味わうすがすがしい気持は何にたとえようもない。丁度初陣にはやる若武者のような、ういういしいはり切った気持とでも申し上げようか。そして全然失点もなく全部の障害を飛越して、さっそうとゴールを切る時の晴れやかな気持は馬に乗る者に与えられた醍醐味（だいごみ）とでも言うべきか。私の書斎には戦果のトロフィが飾ってある。私の得意とするところは、障害飛越競技とB馬場馬術である。それぞれの優勝盃もその中にある。

今や、乗馬は若い人々を魅惑しつつある。特に若い女性には人気がある。馬場に行って見なさい。大体六割はピチピチしたお嬢さんたちである。彼女らと共に乗馬をエンジョイすることは、身体をきたえるとともに、精神の若返りの妙薬であることは疑いない。効果はテキメンで、私は風邪もひかず血圧の心配もない。私が若者にまけない体力と気力を保つことができるのは、実に乗馬のたまものである。

（中央畜産会勤務）

ふるさとから

ご挨拶

春日町議会議長　杉本喜八郎

在京先輩各位に春日町黒井の里から遙かに御健勝を寿ほぎつつ、ご挨拶を申し上げます。

今年は春日町もたいした災害もなく、里は豊作、山は例年になく松茸なども多く、有難い年でございました。しかし総需要抑制の波が、この丹波にも及び、地方自治体は頭の痛いこともまた多いことです。

皆さんのご声援の下に、微力ながら豊かな町づくりにさらに精進することをお誓い申し上げ、総会御出席各位の御多幸を祈りあげます。

山南町町議会議長　村上栄一

総会のご盛会を祝福申し上げます。

山南町長　前田朝一

郷友会の皆様ますますご壮健で御活躍の趣、大慶に存じます。

総会には残念ながら欠席いたしますが、小谷先生の藤原科学賞授賞、郷党の名誉この上なく賞揚いたしますとともに、会員各位の御健闘を衷心よりお祈り申し上げます。

氷上町長　石井敏秋

公務のため、総会には出席いたしかねますが、ご盛会を遙かにお祈りしております。

市島町長　芦田三次

公務のため総会には出席できず、誠に申し訳ございません。

みなさまのますますの御活躍をお祈りいたします。

ふるさと　あれこれ

アマゴ養殖の近況

平岩慎吾

今度の不況は、出口のないトンネルに入りこんだようなものだとか言われていますが、在京の郷党諸兄にも、その乗り切りにご苦心の多いことと思います。山国の丹波でも、農工商それぞれに経営難は深刻で、企業の中には、人員整理などを行うものもかなり出ておりまして、行政当局としても、内職や求人開拓に腐心していますが、いずこも厳しい情勢で、まったく難渋しています。

こんな経済情勢と、一面では食糧危機感を反映して、最近大いに見直されようとしているのは、農業の存在と、自然環境を土台に育つ産

業でありますが、経営は依然苦しいのですけれども、新たな機軸を打ち出す動きが盛んです。

青垣町でも、一度ご紹介をしたことがあったかと思いますが、ご存じ渓流の女王ヒラベ……。正式にはアマゴとヤマメの二種類に分別されるようですが、近年の乱獲で絶滅寸前に立ちいたっておりましたのを、町内先覚の努力で人工養殖に成功し、市場的にもぼつぼつ認められるようになりました。

養殖は、ヤマメにくらべて朱点の美しいアマゴの方に関西の人気があるようで、力点をアマゴに置いていますが、なにしろアユやコイとちがって知名度が低いので、一度食膳にのぼされた方には絶品の味わいをお褒めいただくのですが、今後のPRがアマゴ養殖を産業化する上でかなめになっています。幸い、NHK料理教室の土井勝先生が、各方面にご紹介くだされ、流通面でかなりの新分野がひらける期待をもっていますが、在京の諸兄姉にも是非ご後援いただけるようおねがいいたします。

アマゴは活魚で市場へ送るのがもっともオーソドックスなのですが、遠方へはちょっと無理で、町営養魚場では、ことしから、燻製や粕漬、甘露煮など加工品を試作してみました。大阪高島屋でもかなりの好評でありまして、この面でも、ぼつぼつ量産化していきたいと思っていますので、いつかご試食いただくような機会があれば幸いです。

ともかく、近年瀬戸内海などの汚染はひどく、これにかわって、丹波の山奥から水産資源が生まれる。考えてもみなかったことですが、『魚は山からも』といったキャッチフレーズが、はやく生きたものになることを希っています。

人間のエイジといわれた一九七〇年代がはや半ばをすぎましたのに、なんだか暗雲ただよう昨今ですが、在京の皆様には、どうかご自愛なさって、ともども社会のためにご貢献いただきますよう、切にご祈念申し上げる次第です。

（青垣町長）

春日町の近況――――山田　茂

春日町の近況といっても、こちらに住んでいると、何をお知らせしたらよいか、はっきりした感じが出て来ないが、思いつくままにここ二、三年の間のできごとや、春日町へ来られたとき、ご覧になればと思うことの一つ二つをあげて、責を果したい。

どこへ行っても、変ったといえば、まず道路と建物が増えたことだと思う。

ご存知のように春日町には、氷上町から市島町へぬける国道百七十五号線と、黒井から国領・大路を経て多紀郡へ通じる県道があるが、いまそのバイパス工事が進んでいる。

国道の方は、朝日立野（たつの）より、福知山線の南側から東側沿いに黒井・七日市・多田の集落地と踏切を避け、春日部渡所橋付近に至る道路である。

県道工事は、全線新設を目標にして、すでに棚原・東中間が四年前にでき、引き続いてあとの工事を急いでいる。これが完成すると、こ

の方面の交通事情は画期的に良くなる。
問題の近畿自動車道舞鶴線は、ほぼ路線も決まり、インターチェンジが春日町にできるはずであるが、この方は着工までには、まだ暫くはかかるはず。
道路といえば、牛の神様で知られた天王さん（舟城神社）の前を過ぎ、新しくできた天王坂は、毎日何百台もの車が通り、氷上郡山西部と山東部を結ぶ重要な道路になっている。
特にこの峠付近から眺めた春日町側のひろがりは、郡内一の景観で、この道は船城地区の北側沿いに黒井駅まで延びており、いま県の手で、全面舗装工事が行われている。
また船城平地の中央部を流れる新川の北側堤防の、七・五メートル拡幅工事が氷上町境から小学校裏までできし、このあとさらに黒井まで延長する予定である。
町政三本の柱の一つであった上水道事業は、いよいよ昨年四月から、公営企業として発足している。
全体としては三カ年と約二億円の計画で、昨年十月からすでに船城方面の一部に送水を開始した。いずれ黒井・船城とその周辺を一つにまとめていく構想だが、このあと、水源確保、貯水槽、送配水管などの工事を控えている。
話はかわるが、皆さんは野上野（のこの）二十世紀梨狩園のことをご存知だろうか。
シーズンになると、京阪神方面より大勢の客で賑わい、休日には貸切バス数十台が並ぶほどである。
現在春日町は、農林省から自然休養村の指定を受けており、それでこの付近から国領温泉、長谷池一帯を保養行楽地域として設備を整えるとともに、国民宿舎も設置したい考えである。
いま長谷池には水上ゴルフや魚つり場もできているので、是非訪ねられたい。
次は建物のことになるが、新しいものとしては、まず統合春日中学校と、船城地区にできた園部（そのべ）住宅団地がある。
大路・明徳両中学校の統合が具体的になったのは、四十四年ですが、棚原、野村の境界付近に校地四万二千平方メートルを選定し、三カ年の時日と五億円の費用で、一昨年四月に竣工。さらにこのあとも、郡内唯一の五十メートル七コースのプールと、技術科教室を完成し、これで一応整備を終った。
不要になった大路校舎は小学校が使用し、明徳校舎は、設備一切を公民館の管理により、一般町民施設として利用に供している。
朝日と石才の間の山裾を拓いて造成した住宅団地は、県営、町営合わせて五十戸近くあり、このあと県営住宅十戸余りができる予定である。だから船城地区は今後さらに人口も戸数も増えてくることになろう。
そのほか工場の進出による新築や、地元企業の増改築が目立っているが、環境上好ましくないものや、公害の著しいものがなくて幸いである。もっとも一時工場騒音や、廃液流出事故が起きたが、現在では支障なく操業している。
しかしこの丹波も、近ごろの不況の波で、パートタイムの臨時職員を整理したところもあり、みなそれぞれに経営の苦労が多いらしい。
また農業にしても、一時は生産調整など、期待を失わせるようなこと

があったが、最近になってようやく農業振興計画もその機運が盛り上がってき、土地基盤整備事業計画も各地で進んでいる。やはり農民にとっては、どんな時代がきても、土地はかけ代えのない生産手段であり、皆一所懸命にがんばっているというのが実情です。

今年は丹波も二度の大雪に包まれ、ことのほか厳しい寒さです。この寒さがゆるむ三月二十日が来れば、春日町も発足二十周年になり、そして陽春四月の末には、町長と議会議員の選挙が行われる。

私たちはただ、明るく住みよい町づくりに、一途に取り組まねばならないと、努力あるのみです。

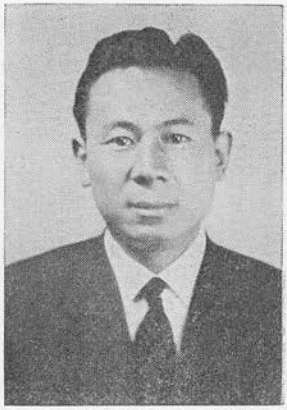
（春日町助役）

地縁三代ばなし――江間時彦（柏原）

祖父の代から柏原を出てしまっているわが一家は、親族も少いせいもあって、一年に一度ぐらいしか郷里を訪れることがなくなっています。しかし、私は柏原にまつわる不思議な縁を感じております。

もう二十年も前のことですが、私が厚生省の課長補佐をしている頃、上山顕さんという厚生省の先輩とある宴席で隣りあわせになりました。この方は、かつて保険局長をされた方です。上山顕さんからお前の国はどこかとたずねられて「私は柏原です」と答えると、「俺をかつぐな、俺は柏原だよ」としかられました。その席ではあまり信用してもらえなかったのですが、上山さんが家に帰られて古文書を調べてみると、実は私の先祖は外様である柏原藩の藩士であり、当時の上山家は幕府直轄の代官として監視されておられたことがわかったのです。

其の後数年たってから、森本潔さんという、これまた柏原出身の方が保険局長になられました。



この方は豪放な面白い方で、将来を期待されていたのですが、惜しくも病没されました

そして、私は昭和四十七年に社会保険庁の医療保険部長に就任しました。

私はその後環境庁に転出しましたので、ついに保険局長のポストにつく機会がありませんでしたが、ともかく医療保険にかかわりのあるポストを、あの片田舎の柏原出身の者が三度にわたって占めたことは、全く偶然であるだけに不思議な地縁を感じさせます。

なお、私が医療保険部長時代には、私の管理下にある船員保険会の会長に上山顕氏を迎えて、「今度は私が御監督申しあげる番ですぞ」と冗談を言ったものでした。

（アメリカン・ファミリー生命保険日本支社副社長）

松茸が生えなくても――渡辺金三（氷上）

終戦後まもなく、混乱から漸く抜け出して世の中が落ちつきを取り戻しかけた頃から、、私は毎年十月になると、一度は丹波へ帰って松茸狩りをするようになった。理由はといえば、私のふるさと、ことに柏原を中心に、丹波の山に入ることがこよなく楽しいからである。特に昭和二十七年十月十二日のことは今でも思い出に残る一コマである。

この日は、東京有楽町・銀座にある大会社の幹部四、五名を招待しての松茸狩りであった。幸いその年は松茸がことの他豊作で、大げさでなく、全く足の踏み場もないほどで、丹波育ちの私が驚くほどだったから、東京のお客さんたちは、文字に表現できないくらいの感歎ぶりであった。

近年どういうわけか、松茸のできは年ごとに激減していく傾向が見えて、稀少価値が高くなっていくようである。

ある人は落葉がきをやらないせいだとか、農薬の害だろう、いや気候の異変だとか、いろいろ説をなす者もいるようだが、本当のところは判らないらしい。それはともかく、私たちには残念でならない現象である。さる二十七年の豊作ぶりなど、全く夢物語で、ほんとうにされないかも知れない。

昨年も十月初めに、柏原の知人へことしのできはどうだ、と問い合せたら、今年は特にできが悪くて松茸狩りが楽しめる状況ではないが、春日町の奥（大路）の方なら何とかなるかもしれん、との情ない返事であった。

ともかく、二十年来続けて来たことだからとあって、出かけてみることにした。時期は会社の都合で多少おくれたが、十月二十二日に帰省し、その翌日大路の山へ入ることにしたのだったが、その前夜から大雨が降って、せっかくの楽しみも台なしになり、とどのつまり、柏原の料亭での畳の上の松茸狩りと相成って、東京へ引揚げてしまった。

それにしても、丹波の山々の緑は美しいし、鮮やかな紅葉、田圃のところどころに残っている稲穂の波、そしてうまい空気。松茸にはがっかりしながらも、ふるさとの魅力は年とともに私に深さを増していくように思えてならない。松茸が生えなくても、年に一度は必ず帰省するつもりでいる。

（渡辺紙工業会長）

我が「ふるさと」――谷垣正雄（氷上）

近頃「ふるさと」についていろいろと考えるようになったのは、人世の平均寿命に近くなったせいだろうか。

我々の世代、即ち明治・大正育ちの者にとって、ふる里の観念は比較的判然と意識されるが、我々都会生活をして各地を転住して来た者の子供たちには、親のふる里に友人も親しい人もない場合は、他の土

地と何ら変らない意識しかもてないのではないか。

それならば子や孫たちにとって、ふる里なるものがないのではないかと調べてみると「生れた土地のこと」と書いてある。このように解釈すれば、現在のように人口が都会に集中しているのでは、東京や大阪その他の大都会を故郷として育つものが多くなり、我々世代の故郷に対する「イメージ」とは大分異なったものとなって、郷愁や親しみの少ない味気ない「ふる里」をもった人世を送るようになるのではないか。

いかに文明の世の中といっても、まことに可哀想に思えてならないのは私達だけの主観であろうか。

それでも「ふる里」に祖父母や父母が健在である間は、他に友人、知人がなくても充分にその山河に親しみを覚えて、やはり自分の故郷であるという実感が味わえるものである。

しかし近親者が居なくなった場合、それが父祖の地であっても、墓参その他で訪ねること以外に、めったに行くことはなくなるであろう。しかも法要等で集まる近親者が全部遠い他郷に在住していれば、二代三代と年代が遠ざかるに従って平素親しみのない父祖の郷里で法要を営むことの意義が薄れて、お互いに負担のみを感じ、その祭祀を自然と忘るようになろう。

このような場合、長男や跡とりといっても、二男三男と同様に、近親者がその祭祀に便利な土地に墓地を移して、少くとも年二回の彼岸参りができるような明るい緑地の霊園を選ぶことは許されることではないか。

しかし故郷に錦を飾るという言葉があるように、故郷の人からその人の出身地であることが誇りとされている場合はまた別問題であるかも知れない。

私のふる里新井村に就いて最近感ずることは、小学校時代の大正年間は氷上郡でも一番小さな部落で、小学校全生徒が二〇〇名内外であったと記憶している。ところが最近の様子を聞いてみると、現在は約一五〇名くらいしかいないということである。新聞その他で、田舎の過疎人口のことが問題になっていることは聞いてはいたが、現実には我が「ふる里」もその傾向が例外ではないことに迂闊にも驚いた次第である。

戦後の町村合併で、郡内の首邑である柏原町に合併されたが、他の町村の大きな合併には及ばず、今日でも人口の少ない方の町となっているとはまことに不思議なことである。

昔から「国敗れて山河あり」という言葉があるが、これは人の世は変っても、山河の悠久の姿は変らないものであること、人世浮沈の激しさを意味している。しかしこの言葉は、必ずしも現代にはあてはまらないのではないか。

最近帰郷のたびに感ずることは、前述の過疎の傾向に歯止めをする対策として工場誘致が計画されており、柏原から新井に到る県道周辺には工場が次第に建設されて、これに伴う従業員の住宅宿舎が建てられつつある。そのために昔の町村の境にあった通称飯盛山（ヒリヤマ）（?）とい

う小さな丘陵も姿を消して宅地となったり、また洪水のたびに柏原川に流れ込んでいた大新屋川（？）の合流点に近い所にあった、柳の群生していた湿地が埋土されて工場敷地になるとか、そのために北山から回路の部落に通ずる坂道の東側の尾根の部分を切りとって土盛りをするから、やがてその姿を消すという話を聞いた。現在でも大新屋部落の東側に田圃を隔てて挙田部落の背後から北に伸びている通称妙見山（？）の尾根も、半分切り取られて醜い赤膚を出している。もうこの辺で雉の鳴き声も聞かれないであろう。これらの変化の激しさは大都会の周辺と少しも変らない。

田舎の発展のためにはやむを得ないことと思われるが、その環境や風致が殺風景にならないよう、公害を出さないよう、緑の多い美しい郷土の保存にも力をつくして欲しいと願っているものは、他境に住んでいる我々だけではないであろう。

郷土の現状を見て感ずることは、終戦後の農地改革によって、明治維新の時に生じたであろう社会の大きな変革と同じように、各戸に大きな浮沈が感ぜられる。木造であった小学校舎が立派な鉄筋コンクリート校舎になったり、また各部落には立派な会館ができており、終戦後の農村の生活向上が国力と平衡していることに感慨を覚えるのである。

我々の少年時代、夕暮れを告げていた入相の鐘の音は、戦時中献納されたまま消えてしまって、新井神社や三宝寺の鍾楼はいたずらに主なき姿のまま立っている。

季節の行事である蕨取りや、螢狩り、盆踊りや、松茸狩り、その他タンポポやレンゲ田に戯れたり、また小川のセセラギに魚を取ったりの田舎の自然の風物も味わえなくなった我々の子孫には、まことに申し訳ないと思うのは、我々都会生活者の実感であろうと思われる。

柏原からの帰り道、我が家のシンボルであった欅の大木も、主なき現在、いつしか伐られて今は小さな若木が残っている。また上山家の前庭にある楓（鶏冠木）の特別保護指定の船の形をした名木も、あれから半世紀を経た今日、帆の部分がスガレて見える。部落の背後に聳えている高見城趾の峰の附近の松も、相当切り取られて高見山の美しい姿もイメージダウンして昔の姿を知っているものを悲しませている。

始めて郷里を離れて神戸の学校に入学したのは十九歳の春であったが、夏休みまでのわずか三カ月が待ち遠しくて、休暇になるとともに飛んで帰った多感の青春時代の憶い出は、その後大阪の豊中に在住のころ丹波新聞に寄稿して、その俳壇の欄に西山泊雲選となって掲載された句、

故郷憶ふ蛙を遠く聞く夜かな

久々に帰省の夜を鳴く蛙

は当時の思い出を句にしたもので、今なお記憶に残っているものである。

（水沢工務店役員）

故郷に心のふるさとを——前田和市（山南）

兄と弟

「兄さん、入党したよ」

神戸から上京した三男坊の弁護士をしている弟が、話がはずみかけた頃、ポツっといった。

「えっ、入党って、共産党か」

それから、明け方近くまで、十一年の年輪の差のある兄と弟は口角泡を飛ばしての激論を闘わせた。

八鹿高校のこと、政治の腐敗のこと、信仰の自由のこと。

世の正義、世の人々の幸せについて、二人はそれを共に求めながら、立っている土俵と取ろうとする手段が違った。同じお腹から生まれながら、その距離は年の差以上に深く、縮まる術も見つからない。

弟はどこへ行こうというのか、昨夏のある一夜、私の血も若く騒いだ。

幸せとは

「どうしてこうも次々と悪いこと、嫌なことが続くのか、どうなっているんだろう」

懸命に努力しているはずなのに、ある人は幸せいっぱいの陽のあたる道を歩き、また一方では苦労の連続に泣く人もある。同じ人間でありながら、どうしてこのように違うのか。

小学校から大学までふり返って、それぞれ同時に巣立ったクラスメートを頭に浮かべても、得意の尾根を渡る人、消息も知れない人、果ては已にこの世に帰らぬ人とさまざまである。

この不平等に立ち向って、政治・社会の改革を叫び、分配負担の公正を求めて行くのも確かに大切なことであろう。しかし、どのようにかち取っても、それだけでは本当の平等も、ましてや人々の本当の幸せなど生まれて来ないような気がする。

第一に「これで公正・平等だ」と思うのが、その人、その人によって違うのだから。私はもっと働き貢献したはずだ……、私のやっている仕事はBさんのと較べようもない、等々。それに、「これで幸せだ」と感じるのも人によってそれぞれに違う。朝起きて、今日も生命あることに感謝できる人もあれば、億万の資産に囲まれながら、なお巨万の富を追ってあくなき人もある。

また素晴らしい宝を同じように与えられても、健康に恵まれて素直に喜べる人と、「そんなものは何も要らない！　健康が欲しい」と叫ぶ難病の床に伏す人もいるだろう。年老いても心配のいらない社会保障の行きとどいた福祉国家と謳っても、気力を失って自殺する老人が増えるという。

とすれば、この世には、全ての人が幸せを得る道はないのだろうか。

差別平等の道

いま幸福な人は、その人の努力もあろうけれども、その人の先祖の方々が世のため、人のために善い行いをして、また、知らず知らずのうちに尊い徳を積んだ（お寺を建てたり、そのための寄進をしたり、仏道を伝道えたり）その余恵として、現在、子孫であるその人の幸せな暮しがある。また、苦しみに明け暮れる人は、その人自身の蒔いたものもあるけれども、遠い先祖、近い先祖の中に苦しみの種をまいた、その因縁が積もり積ってその人に来たからである。

その人の、またその先祖の善行、徳積みと、また悪業の過去永劫の累積の違いそのままが、いま生きている人の姿である。――というの

が、因果応報・差別平等の人生の見方である。とすれば、幸・不幸は生まれながらに決まっていると言える。

けれども、自分のこれからの残された生涯、子や孫の代に至るまで、将来・未来にわたっても、因果応報・差別平等は厳然として生きているということである。即ち、行っただけ、歩んだだけ、徳積みの精進を積むことによって、自分の悪い因縁が切れる。自らの幸せも、子供・孫・子孫の繁栄の道も自分の精進によって拓けていく。因縁の深い人も人に倍する精進努力によって、幸せの彼岸に至ることができる。

思うに、二千六百有余年の昔、大聖釈尊の説かれた転生出離、涅槃成仏の道は計ることもできない不滅の真理(チ)であり、教えられたまま歩むことによって、体解できる歓びの世界だとしかいいようがない。

小谷博士の講演を聞きながら

この間、郷友会の総会で、氷上の生んだ学究の人・小谷博士が、生涯をかけられている生科学の講演をされた。人間は精子と卵子の結びついた最初の、芽生のその時すでに、その一染色体に、これからの体質のあらゆるプログラムが組み込んであると話された。その人の一生のあらゆることが、電子顕微鏡にも写らない極小の微片の中に書きこんであるのかもしれない。その人の頭のできから、結婚から、栄達の朝のこと、悲嘆の夕のことまでが?

先生の話を興味深く聞きながら、そのプログラムに刷り込まれている病気、事業の破綻、交通事故等の不幸の記録のところ(これを因縁といわれる)を、このように世のため、人のためと歩んで行けば、消すことができるのだヨ、と教えられたみ仏の智慧の計り知れない偉大さを思った。

その釈尊の最後の教えが、この日本のしかも東京の一角で、それも私達の生きている今、説かれている。そして、不可思議な救いが数限りなく現れている。いま私は何をなすべきか、小谷博士のお話に聞き入りながら、その尊い仏縁に結ばれている自分の使命の大きさが、さらに深くお腹に滲みて来るのであった。

釈尊が菩提樹の下で悟りを開かれた時、この衆生済度の悟りの智慧を、最初に誰に説法すべきかと深い思惟をされた。そして、何とそこから二五〇キロも離れたところにいた、かつて縁のあった五人の修行僧に説法されたという。

末法の世、仏弟子の末席に侍らせて頂いている在家の私は、機会あるごとに同窓の友に、仕事で縁を得た人々に、同郷の先輩の方々に、この道を伝えて行きたい、そしてまた福知山線の車窓にいつの日か故郷の山に、野に、み仏最後の教えの中に歓び合う法友(トモ)の満つるのを願望しながら、一粒一粒の種を蒔きに帰郷(カエ)ろう。私はいま、そのような生きている歓びに溢れている。

(永愛友商事社長)

鎌倉宮神霊は元神池寺伝来の大塔宮鎧

畑　正義

「山ざる」第五号の巻頭に、神池寺遠望が掲載されていた。私ら在郷者には何の興趣も起らぬ写真なのに、他郷のみなさんには、神池寺といえば、こんなにも深く印象に残っているのかと、改めて痛感させられたのだった。

そこで、神池寺について寄稿する気になった次第である。

私が「大塔宮鎌倉宮神体は神池寺にあった鎧」だということを知ったのが大正十年、それ以来、この真実を解明したいと執念を持ち続けて来た。

ところが去る昭和四十七年になって、漸くこの執念が達成できたので、そのうちのごく一部分を記して見ることとする。

神池寺は丹波叡山

天台宗妙高山神池寺は兵庫県氷上郡市島町多利（春日町多利であったが分村した）にある古寺名刹だ。養老二年（七一八）、法道仙人の開基といわれている。

行基菩薩、慈覚大師も巡しゃくし、また、平重盛も登山し、田地百町歩の寄進もしているという。

天台宗中本山として教化、山伏の修験道場とした。顕密二教が盛んに行われ、堂宇は三十二、僧坊は百余もあって、僧徒らも千数百人にも達し、山内は実に大偉観であった。また、地方の信仰・文化・産業・経済などの中心地でもあった、と伝えられている（氷上郡志）。

大塔宮護良親王と神池寺

後醍醐天皇第六皇子大塔宮（だいとうのみやは間違い。おおとうのみや）は、北条倒幕祈願と神池寺の軍事、経済力援助要請のため、元徳二年九月（一三三〇）、山伏姿となって中納言安居院（あごいん）浄俊を執事長として、夜陰を利用して神池寺に登山された。さらにまた、元弘元年八月（一三三一）、再度の登山もされている。

大塔宮の令旨に従って、神池寺では僧兵はもとより、山麓の若者たちも召集して義軍を編成した。これらの神池寺軍は元弘三年（一三三三）四月八日、京都五条西洞院で、ほとんど全員が戦死してしまっている（松井拳堂著丹波史年表）。

北条幕府の六波羅軍は、神池寺の京都攻撃に対する報復のため、大部隊をもって神池寺を攻撃し、三十二ヵ寺、百余坊を誇った同寺も、遂に元弘三年（一三三三）四月十三日、全山悉く灰燼に帰してしまっている。

北条幕府は、元弘三年五月七日にはもろくも潰れている。その後、後醍醐天皇は足利尊氏（始め高氏）を最重要視され、尊氏は後醍醐帝の准后阿野廉子と腹を合わせ、大塔宮を除こうとして、天皇に奏上して、宮を逮捕せしめ給うた。

大塔宮逮捕の建武元年十月二十二日、宮御殿にあった宮が常に着用

の甲冑は京都を出て、翌二十三日神池寺に護送された。神池寺では境内の鎮守春日神社にこの鎧を安置し、毎年十月二十二・三両日を例祭とし、一般参拝者に公開拝観させていたと伝えられている。

ところで、特に断っておきたいことは、「太平記」にも「神皇正統記」にも、これらのことは書いてないから、護良親王は丹波には来ていない、との説がある。中央文献にあるものだけが史実だ、ということは学問上正しいかもしれない。だが、書いてないことはみな嘘、とのみも言い切れないのではないだろうか。

市島町上牧には、十余戸の「木寺株」がある。その始祖は大塔宮護良親王の侍大将の一人であり、知謀武勇兼備の相模国の住人木寺次郎有次で、弓の名人、しかも強弓の達人で、飛鳥も矢一本で撃ち落した。その賞として木寺相模守に任ぜられ、その人が山麓に住みついたと伝えてもいる。

また、山麓地方では、大塔宮の神池寺登山の伝承は、事実があったればこそ昔から堅く信じ込まれているのだ。さらにまた、大学教授その他の歴史学者も、この伝承が、これほどまでに強いことなどから、ただ単なる伝説とのみは片付けられない、としている。

大塔宮の鎧は京都御所へ

明治天皇は、明治維新の大業は、護良親王から五百有余年、親王の御遺志が実をむすぶこととなったとせられ、大塔宮神社の創建を御熱望し給うた。

そのため、まずその御神体の物色が始められた。宮が天台座主であった比叡山延暦寺、門主であった京都大原、三千院梶井宮門跡などで、宮の遺品でもと探すうち、天台宗妙高山神池寺には、宮が常に御着用の甲冑が保存されていることが分った次第であった（それは大塔宮神体神霊としては、最上の物体である）。

明治維新の年、梶井宮三千院門跡昌仁法親王（還俗なさって梨本宮守脩王）から、「大塔宮の鎧を一度見たいから、最近のうちに、京都御所まで護送して来るように――」との達しがあった。

神池寺貫主旭宥澄は、擅信徒の重鎮、春日町多利の三村嘉一郎大庄屋、擅徒総代、市島町多利（当時はいずれも春日部庄多利であった）能瀬宇八郎、高橋嘉右衛門、山口嘉蔵らと人夫二人計七人で、京都御所へ護送した。

その後神池寺では、梶井宮からは何の音沙汰もなく、京都御所に何回も使者を出して尋ねても、一向に要領を得ない。そのうち、鎧はもう京都御所にはなく、どこかへ持ち去られたなどとの噂もはいり、憤慨したが、どうすることもできなかった。

鎧は東京へ

筆者は、大塔宮の鎧がどういう経路をたどって京都御所から東京神祇官へ行き、さらに鎌倉宮神体となったか、また、神霊となっているのは真実かを調べたくて堪らず、宮内庁書陵部へ行けば分ると思い、同部に一部しかなく、和本に毛筆書きの「明治天皇紀編集の資料『御紀資料稿本』」を閲覧させていただいた。それは未だかつて、宮内庁関係者以外には見せたことはない、という貴重な文献であった。つぎに、その抜粋を掲げよう。

明治二年五月二十七日（公文録・神祇官之部、内閣記録所蔵）

このたび護良親王着用の鎧が、明治天皇の御用のために東京へ護送するように仰せ出された。この道中往復の人馬の休泊その他の諸入費など、すべて当梶井宮門室において支弁するのが、当然のことではあるが、従来から当門跡の会計は大変に困難になっており、かつ、諸物価は騰貴している折柄、多額の経費になり、時節柄大変に恐入ることではあるが、別紙のとおり拝借できますようにお願い申し上げる。

明治二年五月二十七日

梶井宮門室使　鳥居川甲斐守

会計官御役所

（別紙）は、覚として往復旅費などの見積書で、その合計額は金五百両となっている。そしてさらに、同年五月二十八日付で、同門跡使寺島伊予守から神祇官に対し、金三百五十両の借用を願い、この分は本年から十箇年賦で償還する、と書いてある。また、その他もすべて金銭借用のことが主になっている。

これらの記録から推察すると、護良親王の鎧は、鳥居川甲斐守、寺島伊予守と渡辺出羽介ら刀指し三人のほか、人夫三人計六人が馬に積んで、京都から東京に護送し、明治二年五月十五日に東京に到着し、これらの人たちは同年七月十五日に、京都に帰着している。

鎧は鎌倉宮神殿奥深く

「明治天皇紀　第二」中には

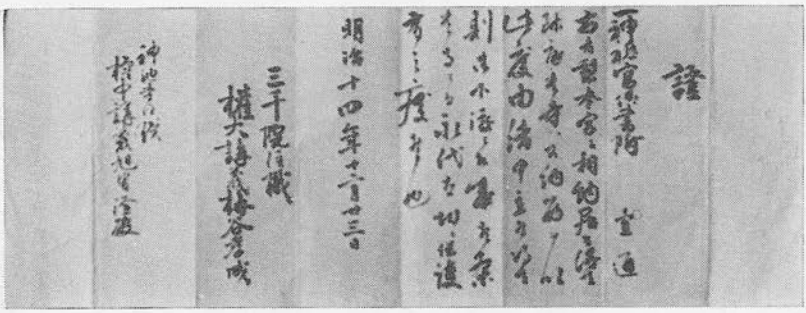
護良親王着用の鎧を御覧

明治二年六月二十日、小御所代に出御、護良親王の着用せし着背長（注・鎧）を天覧あらせられ、尋いで之れを鎌倉宮の神体と定めたまう。此鎧は梶井門跡の所蔵に係りしが、今次命じて提出せしめたまへるなり。

（祭典録・公文録・内廷弁事御用日記）

こうして、大塔宮の鎧は、明治天皇の命によって、鎌倉宮の御神体と定められ、明治二年七月二十一日（注・この日は、大塔宮鎌倉宮の由緒記による）、明治天皇が御創建になった鎌倉宮の神殿の奥深くに、勅封されて、御神霊として安置し奉られたのだった。

なおまた、神奈川県鎌倉市発行「図説鎌倉回顧」によると、鎌倉宮は明治二年二月十三日創建の勅令によって、その月の二十三日に整地工事が着工され、四月十日には造営が完了した。正味四十八日間ででき上ったのだから迅速というべきであろう。なお建設



三千院から神池寺への書簡

費用一切は計一万三千百八十一両であった。

造営完了後は、七月二十日に御神霊が御羽車で宮中を出発、翌二十一日同社に鎮座されたのだった。

御羽車は、賢所（三種神器）を移すときに登載する神輿。四角の台で周囲に欄干があり、赤地錦の帳帷をめぐらしてある。昭和三年、京都で即位式が行われたとき、賢所も御羽車に登載し京都に移された（大日本百科辞典）。

神祇官御書付その他

神池寺ではその後も、梶井宮に鎧の返還をたびたび迫ったが、何の沙汰もなかった。しかし、もう既に忘れかけた頃の、明治十四年十二月二十三日になってから、梶井宮三千院から「証」として、書簡とともに「神祇官書付」が到着した。

護良親王御甲（原本神池寺蔵。下段写真参照）

御胴　前後

御袖　左右

右今度新建有之候

鎌倉宮神体ト被為

定候ニ付御用相成候事

己（注・明治二年）六月　神祇

官印

また、これよりも先の明治三年頃、梨本宮（梶井宮）におかせられては、深く寺擅の衷情を察せられて、つぎの品々を下賜せられている。

梨本宮家御下賜品目録

宮家御守仏阿弥像、志納金五十円、赤緞子法衣一領、七条袈裟一領・梶井宮紋章入柴縮緬幕二張、紋章入高張一対。

さらに明治十九年には、内務省から保存資金として金百円を下付せられている（氷上郡志）。

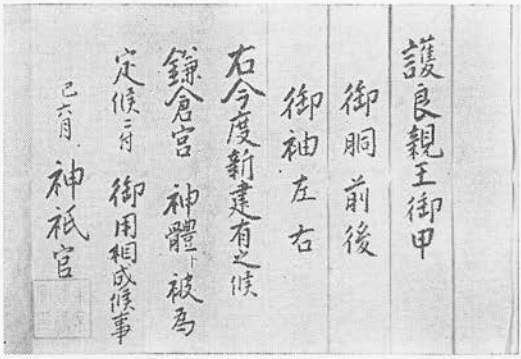
つぎに、神池寺信徒総代、衆議院議員であった故畑七右衛門は、昭和九年三月十九日、第六十五回帝国議会衆議院請願委員会に、自らも請願委員で紹介議員として、「神池寺境内に大塔宮鎌倉宮御分霊別格官幣小社創建の件」を請願している。

畑代議士は請願理由を詳細に説明し、

「この大塔宮と深い由縁のある神池寺に、せめても、御分霊小社を創建していただきい」と、述べている。これに対し、石田馨内務省神社局長は、

「神池寺は大変に重い寺であり、大塔宮の鎧があって、それが鎌倉宮神体となっている事実もあるようでございます」

などと答弁し、この請願は満場一致採択になっている。



だが、官幣小社の創建は、地元負担その他の関係上実現はしなかった。昭和五十年は、建武六百四十一年に当たる。大塔宮の霊安かれと祈るとともに、こんなにも強運の「旭の鎧」の御神霊から、幸運招来を祈るために参拝することも意義あることではないだろうか。

（筆者は春日町多利、神池寺住職。春日町誌編集、丹波新聞に「奔馬の如く畑七右衛門和孝」を連載、「悲憤の緋縅大塔宮と神池寺」を出版、美和村誌監修などに従事）

随感・随想

座頭市のモテるわけ——須原　清（市島）

「勧善懲悪」流行の世相は、それほどその社会が腐敗墜落している証左ともいえないだろうか。

くらしの上で、ドウにもやり場のないところまで押し流された底辺の庶民（精神的にも！）の心を捕えるには、諸悪に対し絶対的に強いモノでなければならない。

ひき続きT・V面で活躍中の勝新太郎扮するアノ盲目の座頭市の——貧しく、平穏に精一杯、稼業にいそしんでいる弱者（百姓・町人）に加えられる影で操る権力者の下端の理不尽な仕打ちに対し——かたくしめられた勘忍袋がついに破裂！　サットとび出す「懲悪」の刃（やいば）の切れ味は、痛めつくされたものの溜飲を下げさせるに充分だろう。

それにしても、一陣の殺風一過……村里を離れて、トボトボと街道を往かんとする彼の後姿に、何かウツロなやるせないニヒルを感ぜざるを得ないのは私の感傷だけだろうか。（集成建設顧問）

私の発病を経験に——荻野定一郎（春日）

昨年二月二十八日夜、突然電車の中で胸痛を覚え、ようやくの思いで帰宅しましたが、深夜でもあり、医師の来診を求めて診察してもらった結果、心筋硬塞症だ、とのことで驚きました。そこで東京の医師を招いて診察を受けまして、各医師が相談した結果、自宅療養をすることとなりました。

それから三ヵ月間病床にあり、その後も二ヵ月間静養に努めた結果、血圧その他すべて平常に戻り、一週間のうち二日ぐらいは丸ビルの事務所に出勤できるようになりました。

しかし、この病気は冬期の寒いときは、夜の外出は絶対に避けるべきであると医師からも注意されておりますので、残念ながら、夜の会合は辞退しております。

ところで、私の発病の夜、宴会があって、カンカンとガスストーブが焼かれ、外に出ると非常に寒く、こういう急激な空気の変化に心臓がやられたようです。ことに老年の方には充分ご注意が必要と存じます。ご参考までに——。（弁護士）

俳句 和歌 詩

丹波栗――植村章子

（春日・長生）

老人の医療費が無料になったら一向に病気しないという昨今です。会員の皆様はいかがでしょうか。役員の皆様、「山ざる」編集の皆様には一方ならぬお世話になりまして、蔭ながら感謝いたしております。

友をつぎつぎと喪い、若いころ病弱の身が七十二歳までも生きて、自分ながら驚いています。会員の皆様のご健在を……。

＊

（故郷から栗を贈られて）

丹波栗皿に大盛り月に供御
気紛れに作りし菊に庭狭し

（浜名湖大平山山頂にて）

展望台入江入江の秋ふかし

（新　春）

初鏡余生安らう白髪かな
弾初めは独りひそやか古き唄

わが手で喰ううまさ――音無太美子

（春日・黒井）

今年は私のいわゆる厄年とか。さる六月中旬大腿骨頭部骨折のため手術をして三ヵ月余り病院生活をしました。退院後も温泉療養などにいき、十月末の現在も注射・マッサージに通院いたしております。

このため主人には苦労をかけ、黒井にいる老母にも心配をかけ、大変な不孝をいたしました。皆様に心配をかけ、お世話になり、「ありがとうございます」を朝から夜やすむまで何回いって暮しただろうなんて思っています。患者はあたえることゼロで、親切を人から受けて感謝ばかりですものネ。

病院にいますと、美しい夫婦愛をよく見かけます。すばらしいなァと思いました。私も入院中、夫への感謝と決意、そして退院帰宅の日を忘れてはいけないと思っています。何しろ五十日間食べさせてもらっていたものですから、自分でできるようになった嬉しさ、ありがたさを、シンから知りました。

皆様、どうか私の二の舞いを踏まれませんよう、お大事に遊ばして

ください。

（雑　吟）

上半身起きて吾が手で喰ううまさ
秋雨に湯治の足をいとほしみ

心田耕録

藤本久一

とある人派手なネクタイ身にせるは歳越えて若きに挑まむ心
受験生空気足らぬを日々かこち解読にぶるを空気のせいにす
味醂粕の栗皮色の瓜漬に輝やく飯はみ生きに幅あり
暑き日の命をつなぐもののかぼそさよ冷しそうめん冷奴胡瓜揉み
協奏曲の演奏ひたすら聴き入りて音の流るる行く方追へる
ダヴィンチより命十年長くともふわつく蚊の一鳴きならめ
鷲鼻鉤鼻かぐら鼻あるに人の凡化に鼻も曲れぬ世となりぬ
商売の弱音を顔に書きしことなくて通せる商魂一徹
織維のまち休機相次ぐ不況にて道行く織娘(こ)影薄し
真心こもる十円多きお賽銭物価不安の象はここにも

信濃路にて

渡辺久子

（氷上）

（富士高原にて）

ふみ入れば行方も知れずなると云ふ青木ヶ原の樹海しづもる
風穴の氷の壁はあつくして冷えびえと冷えびえと長き穴かも
精進湖に魚釣る人の影の見ゆ小雨にけむる裾野めぐれば

（信濃路にて）

板橋の宿（しゅく）出で戸田の渡し越え今様の旅はバスにゆれつつ
碓氷越え軽井沢から小諸へて初秋を探ぐる信濃路の旅
晴れたれど浅間は見えず雲湧きてただわづかのみ裾野をそれと
洋グルミ枝もたわわに実りゐて千曲川面の見えかくれする
善光寺の座像のお目はすりへりて満願の供物ところせましと
門前に商なう人のすさみたる言葉はあはれここ善光寺
何ごとか小石に心移しけむ賽の河原をここにみたてて
白き雲の湧きたるあたりは吾がめざす志賀の山並夕陽にぞ映ゆる
霽(は)れたれば西にアルプス望めるを雲海に赤き太陽は入る
志賀はくれて四方の山々影みえず発哺（ほっぽ）のあかりを
　星とみまがふ
朝あけに雲あし早く明るみし西の青空もおほひつくしぬ
驟雨降る高天ヶ原に向ひゆくリフトの吾子は心細げに

雨に打たれリフトの下に咲きつづくりんだうの花のむらさきの濃さ

（折ふし）

ごとごとと地ゆれはしたりむし暑き梅雨の晴れ間の昼下りなり

嫁がせて案じ給ひし父母の心身にしむ齢となりぬ

吾子等いま有馬の里に祖母とゐていで湯に入りて和めるらむか

植木屋の裁ち落したる無花果（いちじく）を吾子挿したるが

根づきたるらし

名月を見むと尾花を刈りて来る吾子等のありて月は輝く

楢の葉の黄ばみ一入あざやかに去りゆく秋を惜しむ日々かな

『望郷之賦』

松山竹水

故里（クニ）を出るときや　男の意地で
独立独歩の　こころ意気
文化をほこる　東京で
ペンひとすじに　西ひがし

時には美酒や　美女を追い
酔うてさまよう　ネオン街
悲恋のなみだ　ふりはらい
無冠の帝王　夢に賭く

大震災から　不景気に
失業続出　ちまたにあふれ
食うや食わずの　昭和初期
起死回生は　大陸ぞ

青年将校　右翼と組んで
五・一五やら　二・二六
夜打ち朝がけ　事件を追って
恋する暇も　あらばこそ

故国の安泰　いずこにぞ
弾圧の嵐　吹きまくり
迫る危機にも　ものいえず
自由のペンは　凍りつく

一転戦雲　急を告げ
撃滅米英の　大号令
辺境南溟の　出撃も
戦況日々に　不利となる

悲報相つぎ　術もなく
あたら青春　消ゆるのみ
孤島に散った　戦友を
天にむかって　慟哭す

飛行機軍艦　みな沈み
あわれ日の丸　姿なく
死の灰かぶる　無惨さに
義憤の筆は　折れしまま

待ちに待ったる　終戦に
平和の鐘は　天のこえ
自由の尊さ　今に知り
スクラム組んで　起ちあがる

飢餓とインフレ　押しよせて
売り食い買い出し　ままならず
栄光の民　いまいずこ
喘ぎながらの　十年間

朝鮮戦争は　恵みの雨
降って湧いたる　好景気
高度経済　成長で
一億人民　万々歳

中東戦争と　石油危機
千載一遇とは　この時ぞ
狂乱物価　上知れず
泣くにも泣けぬ　にがい顔

ああ変転の　七十年
青雲遠く　ゆめと消え
会者定離の　老いの果て
枯淡の心境　深まる日々

ふるさとの風　ほほえみて
山川草木　みないとし
望郷の心　たぎるとき
郷愁われを　揺りおこす

心やすらぐ　思いあり
ふるさとわれを　抱きしめん
ああわれ丹波に　帰らんか
ああわれ丹波へ　帰らんか

商店経営初歩必須要項（おみせのよもやまばなし）〔2〕

村上末吉
（春日・中山）

前号では一〇坪（三三平方米）の喫茶店を計画するとして「売上げはどのぐらい見込めるか」という所で終りになりました。

次に店を開くにあたり初歩的な重要問題をとりあげましょう。それは「場所」ということです。「場所がら」という言葉はよくご存知だと思いますが、専門語では「立地条件」といいます。この場所がらによって、同じ商売でも内容が変るということを知っていなければなりません。

商売とは「立地産業」であるといわれるほどで、立地によって成りたつかどうか、採算がとれるかどうか別れます。

たとえば或る手ごろな場所が見つかったとします。その場所で自分が始めようとする「喫茶店」は、果して営業するのに適する場所かどうかが、まず検討されなければならない基本事項でしょう。適するとして客層はどうか、商品の値ごろはどのくらいか、どんな物を出せば客が来てくれるか、そしてそれは採算に合うかどうか等を考えるわけです。

場所が先に見つかった場合は、喫茶店ではなく、スナック式の方がよいかもしれませんし、もっと違った物販（品物を売る商売）の方がよいかもしれないというように、場所に応じた考え方をし、場所を活かすことが第一です。どんな場所であろうと喫茶店をやるんだ、と決めこんでしまうことは無謀といえましょう。

よしんば喫茶店でいくしかないとしても、喫茶店にはいろいろ種類があるということは、既に申しあげたとおりです。

東京都内に例をとって具体的に述べてみましょう。たとえば銀座の本通りでやる商売と、新宿の本通りでやる商売とでは、同じ業種であっても違うはずです。また新宿、池袋、渋谷という三つを比較しても、相当違っていることに気がつきます。

ご承知のとおり、銀座は住宅地からはるかに隔った都の中心にあります。このような所では多分に社交的となり、流行的であり、トレードマーク的な商売となります。

それに対して新宿、池袋、渋谷という山手街は、後に私鉄が延び住宅地を控えていますので、生活と直結しており、社交的というより人間的、家族的、歓楽的になってきます。その点でこの三者は共通しており、銀座と違う点がはっきりしています。

ではこの三者の相違はどうでしょう。新宿は、乗降人員は日本一を誇っています。新宿は中央線で象徴されるとおりサラリーマンの街で

あり、特に若者の街であるという特徴があります。

買物は新宿の本通りで、飲食や遊ぶ場所は三越裏とか歌舞伎町ではたし、銀座ではみられない人間臭さがぷんぷんしている街であり、どこででも楽しめ、遊べるという多様性をもっています。

次は池袋ですが、池袋は新宿を少し雑にして小型にしたものでしょう。街の発展より人口増加の方が先行したために、人ばかり多くて、街にその人口を咀嚼しきれないジレンマがあります。新宿ほどの巾の広さ、横の広がりがありません。西武文化にみられるとおり、雑然とした感じで寄せ集め的な所がみられます。したがって客層は新宿より少し低くなるといえます。新宿より一層大衆的で生活とより直結的である、と言った方がよいのかも知れません。

次に渋谷について申しますと、渋谷は東横線にみられるとおり、後背が田園都市的な環境のせいか、サラリーマン的な性格がより明瞭です。わかりやすく申せば経済的には豊かでないが、体面とか体裁を気にする階層がめだちます。「ケチ族」が多いといった方がわかりやすいのかも知れません。

渋谷という街は摺鉢式になっていて、底にひらけた街です。新宿、池袋に比べて底が狭いという、地理的条件の不利をどこまで克服できるかが問題です。

新宿は中央線文化で、頭のよい信州人が経営者として多い街ですし、池袋はよく働く北関東人を主にした街といえますし、渋谷はブチブルな都会人を根幹に発展している街ということができます。

以上新宿、池袋、渋谷という三者について、一見同じに見える山手街を例にとって、その相違を私なりに解釈して申し述べたものです。

皆さんがご商売を初められる時に「場所がら」「立地条件」を考え、それに適応した商売をして頂くために何かの参考になればと願って申しあげたまでです。

これらの三つの山手街より一層住宅に接近した街即ち郊外型の街になりますと、商売はむずかしくなり、人間関係の深さが増してきます。都市では一般的に中央ほど地価が高く、郊外に行くに従って低くなるのが常識ですが、それは客数、客単価も高い所から、だんだん低くなることは当然であります。資金力のある人は立地をお金で買い取ることであり、資金力のない人は立地を買えないので、自力の頭脳と労働力によってそれを補うと考えるのが至当ではないでしょうか。

また、同じ街でも人通りの繁しい場所と、寂しい場所、角地、間口の広いまたは狭い店、前面道路が広い所狭い所、物販店向きの場所、飲食店向きの場所またはバー向きの場所等々種々雑多です。人通りが多いので、こんな場所だったら何商売をやってもはやるだろうなあと考えるのは浅はかです。人通りが多すぎますと、人波に押され、店の存在が失われることだってありますし、人が通る所であって買い物をする場所ではない場合もあるからです。

人間も魚と同じで、魚が群をなして泳ぐ所と、止まって休んだりエサを求める所はおのずから定まっているのではないでしょうか。魚を釣るには、魚がエサを求める場所に棹を落すことがよいのではないでしょうか。魚釣りの名人とは、その場所を選ぶことに優れていることが第一の条件ではないかと思います。

或る洋品屋さんから、この街には洋品屋が一店もないので出店したいがと相談を持ちかけられました。私は、この街では洋品屋は無理で

しょう。今までに一店もないということは、洋品屋が育たないということを証明しています。一店もない街並を探すよりも、今はやっている洋品屋の隣りに出店したら失敗は絶対ありません、と答えました。それは丁度誰も釣りをしない所で、ぽつんと一人棹を落している姿と同じで、よくつれる所は人も多いが失敗もないのと似ているのではないでしょうか。

自分のねらっている店がその街並にないから、新開店をするというのはむずかしいことで、不可能を前提としてよく調査しなければなりません。

喫茶店の話に例をとって、最近経堂で開店された店について述べましょう。駅から一〇〇メートルほど行った左側で、二二坪（六七平方米）の珈琲店です。この通りには小さい、暗い喫茶店らしき店が二、三店あります。したがってこの街並に明るい楽しい店で、それ相当の広さをもったものならば当るということはっきりしています。詳しい条件は省略しますが、経堂ではおいしい珈琲を飲ませてくれる本格派の店がないからです。

この店を経営されるのは喫茶店には全くの素人ですが、兄に当る方で経験された方が指導され、やる気になられたものです。いくら兄がおられるといっても素手ではできませんので、都内のビジネス街に数店を持つチェーン店の系列に入られ、開店されたという経緯です。当初から八万円前後の売上げですから、まず成功とみてよいでしょう。

しかし場所がらということで、一つ注意したい点があります。それはこのチェーンがビジネス街で経験したことを、そのまま住宅街での経営でも同じ考え方で営業を開始したということです。

一例をあげますと、営業時間が朝八時から夜七時までという設定です。ビジネス街なら当然こうなりますが、住宅街では八時の客はありません。その代り夜は十時、十一時は多く、夜の七時以後が大切な時間です。朝は十時開店でよく、夜は十時または十一時までに変更すべきですし、そうすれば八万円の売上額は二〇％程度伸びることが見込めます。

住宅街の客とビジネス街の客は全然違いますから、他にいろいろ注意しなければならない点はありますが、営業時間を場所がらに応じたやり方をするだけで、これほど違ってくるのです。その点はご注意申しあげましたので、その結果は明らかです。

では場所がらについて留意しなければならない事項を、一まとめにしてみましょう

㈠ その場所で広さにより店に入ってくれるであろう客数の予測をたて、どの程度だったら支払ってくれるかを考える。専門的には、販売面積について消費効率を消費人口の対比から推定するという作業です。

㈡ 喫茶店である場合、客が立寄りやすいか、或いは立ちより難い場所ではないかをよく検討する。電柱、街路灯等も障害になりますから些細にみます。

㈢ その場所は、今はよいとしても将来とも発展するだろうか。或いは衰退する可能性はどうかを見て、前者の場合ならよいが、後者の場合はいくら条件がよくてもあきらめます。

㈣ 物販の場所か飲食に適する街かどうかをよく観察し、人の通るだけの街か、止る街かを見極めます。

(五) 同業種が集まって盛っている街か、異業種が程よく集まっている街か、まだ欠けた業種がある街か等をよく調べます。発展した街は業種が整っており、未発展の街は業種が混在している。

(六) 自分の計画している業種がその街にどれほどあるか、そしてそれはどの程度の店か詳しく知ること。その店と競争できるかどうか、別の特長が打ち出せるかどうかが問題になります。

(七) 同業種の店がないときは、その業種が育たないという考え方にたって、なぜ育たないかを掘り下げて検討して見ます。

(八) その場所がらは、自分の性格にぴったりくるか、何か異和感のようなものはないか。俗に場所がらにほれられるかどうかです。

(九) 資金的に無理はないか、採算はどうか等を専門家とよく協議し、できれば経理士や銀行等とよく話し合うことです。

サービスとは何でしょう

現代におけるサービスとは何でしょう。何をサービスと言うのでしょう。改めて聞かれるとその答えに戸惑うのが、このサービスという問題です。

『お客にサービスすることです』と言ってしまえばそれまでですが、それでは説明になりません。

サービスは辞書によりますと、客への奉仕。給仕。接待。もてなし。となっております。客への奉仕といっても際限なく広いもので、その詳しいことは後で述べることとしますが、その前に従業員の問題を少し考えてみることにします。

現在は従業員が集まらなくて、どの店でも頭が痛いことはよくご存知のとおりです。中学卒業生は『金の卵だ』などと言われたことがありますし、このような不況の時代でも、零細企業へは誰も来てくれないとみるのが常識です。

したがって、サービスが過重になるどころか手が足りなくて、ろくにサービスができないというよりもっとひどいもので、ノーサービスということになります。

省力化が進んで一人でも従業員を減らそう、能率を向上しようと考えているのですから、サービス等とんでもないという言葉さえ聞かれるのです。

その上今の若い人たちは、人に奉仕するとか、社会に奉仕するということを知らないというより馬鹿らしいと考える風潮があります。ですから経営者がいくらサービス精神を説いても、従業員には通じない怨みがあります。

それでは商売にサービスは必要ないかと言えば、とんでもないことで、サービスのよい店は繁昌しますし、よくない店に客は来てくれません。

だからサービスは必要で、現在に応じたサービスとはどういうことであり、どうしたらよいかを述べたいのですが、紙数がありませんので以下次号へ譲ることといたします。

サービスは無料ではない、経済的な考え方、精神的なもの、容姿態度的なもの、制度的なもの、無形的なもの、間接的なもの、直接的なもの等に分けて詳述することにいたします。

皆さんご機嫌よろしゅう。

(桂工務店社長)

(以下次号)

深尾女史逝く

——詩人として平和運動家としての多彩な生涯——

郷土が生んだ閨秀詩人深尾須磨子さんは、さる四九年二月ガン性腹膜炎のため東京千駄ケ谷の代々木病院に入院加療中、三月三十一日午後九時四十分、多彩の生涯を終えた。享年七十八歳（自称？）であった。四月六日午後一時から新大久駅近くの全竜寺で葬儀を行い、引続き告別式が行われた。

女史は春日町三井庄の荻野家に生まれ、京都の菊花高女卒業後、深尾氏と結婚、大正九年、夫の遺稿集「天の鍵」に自作の詩をのせたのがきっかけとなって詩壇にデビュー、歌人与謝野晶子に深く師事し、その後数回にわたってヨーロッパに渡り、フランスのソルボンヌ大学に学んだ。その関係でフランスの詩を紹介したり、「須磨子詩集」「斑猫」など、詩集や随筆を発表した。戦後は平和運動にも精力的に活動を続けて広く知られるようになっていた。

告別式スナップ

一方丹波のふるさとにも非常な愛着を抱いて、よく帰省もし、随筆にも丹波が出て来るし、丹波の文化人で組織していた「丹波会」（下中弥三郎氏主宰）には必ず出席して赤い気えんを吐いて男性たちをたじたじさせていた。

フルートの名手でもあり、いろいろと話題も多い才女のひとりであった。

なお女史については、別記のごとく親戚に当る佐々木盛雄氏と、生前知己を得た篠山出身の森田淳二郎氏に追悼の一文を寄せてもらった。

（竹）

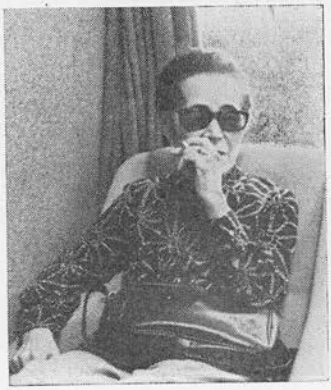
須磨子さんを偲ぶ

佐々木盛雄（春日）

女流詩人として知られていた深尾須磨子さんが亡くなられたのは、昨年昭和四十九年三月三十一日のことで、早くもその一周忌が訪れようとしている。

深尾さんは、現在の春日町下三井庄の荻野家の末女に生まれたが、私の養父や、実母とは縁続きであったので、私も時折り訪ねて行ったりして、亡くなられる直前まで親しくしていたが、深尾さんから詩の話を聞いたことは一度もなく、会えば丹波の話ばかり聞かされた。

結婚するのなら、嫁は丹波からもらえとか、丹波の芋や、大根を煮込んだ田舎料理で一杯飲ませる店を東京でやらないかとか、会えばいつでも丹波の話が出たものだが、深尾さんの書かれた詩集や、随筆集にも、丹波のこと



深尾須磨子さん（48.7）

が盛りこまれてないものはないほどに、丹波のふる里を愛しつづけた人だった。

深尾さんが生まれた荻野家の代官屋敷というのは、私の子供の頃にはすでに跡形もなく、ただ大きな松の木が空を衝いてそびえる下に、紅い花をつけた椿の木が残っていて、在りし日の面影をしのばせていた。

深尾さんの父、荻野小次郎福秀という人は、鳥羽伏見の戦いにも加わったなかなかの剣豪であったが、敗戦のうき目にあってからは、屋敷内に道場を開いて近隣の子弟に剣術を教えていたという話や、ある時には道場破りに来た数人の荒武者が、小次郎さんに叩きつけられて逃げ帰った話などを村の古老からいくたびか聞かされたこともあった。

小次郎さんは明治になってサムライ稼業を失職してから、神戸に出て生糸貿易などに手を出したが、文字通り「武家の商法」で失敗して家運は没落、おまけに深尾さんが四歳の時にこの世を去ってしまった。

母のきしゑさんは、篠山青山藩の家老の長女に生まれた賢夫人であったそう。だが、残された七人の子供をかかえて苦労されたようだし、一升の米が買えず、五合の米を買って、前掛けの下にかくして逃げて帰った幼き日の話も、深尾さんの随筆等に出ているほどである。

荻野家がなくなってからの深尾さんは、長姉富恵さんの嫁ぎ先の隣村、国領村棚原の波多家を生家のようにしておられたが、その富江さんは深尾さんより早くこの世を去られ、いまは長男の幹雄さんが波多家を襲いでおられる。

また弟の洋三さんは、私と一緒に柏原中学へ通った仲だが、敗戦で東京が焼野原となった時、焼け出された深尾さんのために家を建ててあげたりして、終始世話をされた美談の人でもある。

深尾さんの生涯は、その詩や文学や、音楽などを別にしても、とてもこんな走り書きにまとめられるものではないが、深尾さんが亡くなられてから、後始末のお手伝いをしていて、私がはじめて知った珍談を一つだけ紹介してみよう。

深尾さんは明治二十一年に生まれたが、その時の戸籍を見ると「荻野しげの」となっているし、私の母などはいつでも「しげの」さんとばかり呼んでいた。

「荻野」が「深尾」に変ったのは、深尾さんが京都高女に学んでいた頃、京都帝大の学生であった深尾青年と結ばれ、結婚して深尾姓に変っただけのことだが、それでは「しげの」がどうして「須磨子」に変ったのかということであるが、それが実に面白いのである。

京都時代の文学少女「荻野しげの」は、源氏物語に夢中になっていたともいわれるが、その影響のためかどうかはさだかではないが、親のつけた「しげの」という名前が気に入らず、何とかして「須磨子」に改名したいと考えあぐんだ末、妙案を考えついたのである。

そして村内に「しげの」という名前の娘の

いる山内家に頼んで「荻野しげの」を養女として入籍してもらった。すると山内家には「しげの」が二人いることになり、同じ家族に同名の者が二人いるのは、本人も困るし、村役場としても区別に困るということを理由として、戸籍の改名を認めさせたというのである。

だから一旦は養子縁組みの入籍手続をしておきながら、山内家に入籍して「しげの」が「須磨子」に変わると、こんどは早速に協議離縁で、また元の荻野家に戸籍を戻してから、結婚して「深尾須磨子」となったというわけである。いかにも深尾さんらしい頓智な発想に、いささか驚かされる笑い話ではないだろうか。

パンタロンをはき、口紅をつけ、サングラスをかけた晩年の深尾さんは、誰の眼にも八十を過ぎた人とは見えなかったし、ちょっとソ連を見てくるからといって気軽に飛立った深尾さんではあったが、帰ってきて間もなく入院して、そのまま八十五歳の多彩な生涯を閉じてしまった。

亡くなると、すぐに東京新橋の日生ホールで盛大な「深尾須磨子を偲ぶ音楽祭」が華やかに催されたり、また「深尾須磨子特集号」が出版されて、多くの詩人や、門人たちが深尾さんの詩才と詩魂をこもごも謳いあげている。そして、深尾さんは多くの人々の心の中に、今も脈々と生きつづけている。

深尾さんは、フランス仕込みのフルート奏者としても知られていた。「笛吹き女」の十二章は、フランス留学当時の深尾さんの自画像でもあった。一管の横笛に情熱の唇を接して、嫋々と吹き鳴らした在りし日の深尾須磨子を偲ばせる形見の愛笛が、いまは淋しげに仏壇の片隅に眠っている。

（元衆議院議員・評論家）

（註・文中の波多洋三氏は現在大阪電気暖房専務）

《特別寄稿》

フルートとの出合い

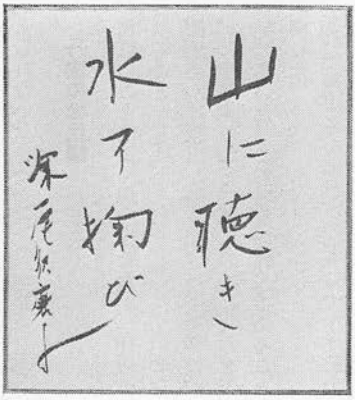
森田淳二郎

エキゾチックな化粧

「君は同郷人じゃないか。行って頼んで来いよ」

編集長のひと声で深尾さんに詩を頼みにいく分担は私に決まった。いまから三十七年前、昭和十三年の六月下旬、「少女の友」九月号の編集会議の席上である。

当時私は早稲田大学卒業ほやほやの駈出し雑誌編集記者だった。そして深尾さんに関し



ては同郷人であることさえ知らず、従って作品もあまり読んだことがなかったが、フルートを吹く女流詩人の第一人者だということは頭にあった。恐らく私がフルートを聞くのが好きなのと、詩人の楽器としてはフルートが最もふさわしい、と考えていたからにちがいない。そこで訪問が決まると反射的に、この女流詩人にぜひ一曲吹いてもらうんだ、と勝手にきめこんだ。

おぼろげな記憶だが、深尾さんの住む新宿アパートは新宿駅から甲州街道を少し西に行き、代々木の方に曲った閑静な環境にあった。淡クリーム色をした五階建のコンクリート建築で、さすがにヨーロッパ暮しの永かった詩人の住居だという気がした。

部屋は四階だった。定員二名くらいの小型エレベーターは当時では珍しい自動昇降装置で動いていた。私は生まれて初めて自動装置のボタンを押したのだが、いまとちがって簡単な操作ながら不安を覚えたものである。

私のノックで、ドアを開けた深尾さんが愛想よく「さあ、どうぞ、どうぞ」と招じ入れてくださった。この時の第一印象は、声だけなら女流詩人というより丹波出身のなつかしいおばさんだったが、お顔ときたらそれは丹波の「た」の字どころの騒ぎでない。

大体、深尾さんのお顔はどの部分も彫刻的にがっしりしていて、たださえ印象は強い。そこへもってきて、その頃東京でも珍しかった淡ブルーのアイシャドウをかなり濃く入れていた。それが輝やく瞳をより大きく見せた。そのうえ頬紅が普通の女性よりはるかに広く濃くはいてあり、口紅も相当どぎつく、各部分が顔全体を立体的に盛りあげる効果を競っているようであった。私は紅毛碧眼という熟語を思い浮かべた。まさにエキゾティックなメーキャップで、外国劇を演ずる新劇女優の舞台化粧なみであった。

私はさすがにすべてにちがうんだな、と感心する一方、これがもし女流詩人の第一人者でなくまたフルートを吹いてもらう下心がなかったら、このお化粧にひるんで逃げ出したことだろう。

この時の深尾さんのお年を亡くなられた時の年から逆算してみると、四十を一つか二つ越していたことになるのだが、私にはもう少し年かさに見えた。年齢では鯖をよむのが癖のようだったから、或いはもう少し上だったのかもしれない。

丹波の松柏類

お化粧のことはよく思い出せたが、洋服や間どりのことなどはどうしても思い出せない。深尾さんは駈出し編集記者に卒業学校のこと、入社試験のこと、郷里のことなどを矢継ぎ早に訊いた。こちらも同郷人であることを説明した。

「それで森田さんは丹波のどこで生まれたの?」

この質問の「森田さん」という発音に私は同郷人だな、アクセントはお国の手形だなということを肌身をもって感じた。

「多紀郡です。篠山から東へ三里ほど行ったとこの福住です。先生は?」

「あたしは氷上郡の国領ですよ。お互いに丹波の松柏類なのよ。素晴しいのよ、松柏類というのは」

ところが残念ながら私は松柏類なんて言葉は聞いたことがないので、ピンとこない。明治の匂いのする熟語だなと思いながら、そのままにしていたが、この原稿を書くに当って広辞苑を引いてみた。裸子植物の一群で、マ

ツ科・スギ科・ヒノキ科・イチイ科などの総称とある。どうやら転じて操を守って変えないことのたとえらしい。

丹波人の特性にそういうのがあるなんて聞いたことはないから、まずはこの礼讃は深尾さん独特のものというより、深尾さんの自讃であり示威だったのじゃないかな、と思っている。

フルートの女流奏者

今回の訪問は私にとっては初めてのことだが、編集部の先輩は顔なじみで、深尾さんの口から軽く先輩たちの下馬評が出るなど、私は若さの甘えもあって忽ち打ちとけた気分になった。だから九月号に詩一編などという依頼の用件は簡単にすんでしまい、あとはフルートを吹いてもらうのが唯一のお目当てとなった。

「先生、私はフルートが好きなんです。モイーズが大好きなんです」

少々きざに聞こえやしないかと思ったが、深尾さんにならモイーズくらい持出さなければ太刀うちできないという気持であった。実際その頃フランスのモイーズというのは世界的なフルート奏者で、ビクターでも何枚かを売出していた。

「そう、あたしはパリでモイーズに習ったのよ」

「はっ！」

私はびっくりしてしまった。まさか、と思った。しかし深尾さんが嘘をいうとは考えられない。では深尾さんは聞きしにまさる相当な腕前なんだ、と目を見はる思いであった。

気を静めて一曲をお願いした。どういう言葉で頼んだかは覚えていない。さすがに少々照れながら深尾さんは手近にあったサックの蓋を開け、二本の銀色の管をとり出して一本に継いだ。

「これは銀製なのよ」

これを聞いて二度びっくりである。私は半ば呆然として目の前の動作に見とれた。

深尾さんは静かに歌口をしめし、忽ち低くゆるく、また高く速く吹き始めた。指がよく動いた。息もよくつづいた。

私はだんだん深尾さんの真剣な顔を見ているのがつらくなってきた。詩人の吹奏情熱に打ちのめされる感じで下を向いて耳をすましていた。すると深尾さんの吸う息吐く息がだんだんにはっきりしてきた。

曲は何だったか覚えていない。恐らくスペインの舞曲ふうのものだったと思う。私はこれでとうとう女流詩人第一人者のフルートを聞くことができたのだ。抒情詩人にとって、フルートくらいふさわしい楽器がどこにあろう、それを深尾さんは私の目の前で実現して見せてくださったのだ。

私はもう呆然と聞き入るばかり、恐れをなしたお化粧のことは見なれたせいもあり、フルートの刺戟に消されてもうなんとも思わなかった。むしろフルートにふさわしいメーキャップとさえ考えていた。

一編の少女詩

私の深尾さん訪問は、初対面の強い印象と感激のうちにすぎた。

その時の依頼で、後日いただいた原稿は左の少女詩一編である。

赤い灯かげ

深尾須磨子

こぼれて匂ふスタンドの
赤い灯かげのなつかしさ

à mon cher
f marita

au souvenir
de Sodegaya

Sumaco Doucao
à Tokio — 47

秋の来る夜のひとときに
どんなねがひをかけませう

小さな胸にあまること
まづはいくさの場のこと
次はあなたと指きりの
秋の約束ないしょごと

灯かげに通うアンヂェラス
鐘のしらべの絶えぬ間に
をとめ心の白い花
サンタ・マリアに捧げませう

これを読んでどう思うかは各人勝手だが、この少女向け七五調一編はなかなかどうして少女向けの甘っちょろい作品ではない。なるほど情景設定と詩情はいかにも少女好みだが、その表現技巧はかなり高度のものである。抒情詩人としての深尾さんの面目は充分に発揮されている。特に二節目の「小さな胸にあまること、まづはいくさの場のこと」などは当時の時局意識をうまく織りこんでいる点もにくらしいくらいに上手である。

古い綴じ込みの『少女の友』をとり出してみると、この詩のさしえは中原淳一氏が窓辺近くスタンドの影に寄る大きな目玉の少女を描いて情景を出している。

おかげで私は、この作品によって原稿依頼の面目を施し、

「君は同郷のいい先輩をもっているね」

と編集長からひと言うれしい言葉を聞いた。

——それにしても大層昔ばなしとなったものである。

（実業之日本事業出版部長。夫人のまさ子さんは氷上郡成松の植木医院三女）

図版説明＝一九四七年（昭和二十二年）、戦後初めて私が祖師ヶ谷の先生自称の鶏小屋にお訪ねしたとき、「神話の娘」という小型詩集をくださった。詩集の見返し頁に書かれた先生の直筆である。手なれた横文字がなつかしい。

（筆者）

郷友の長老・田誠さん

松山幸逸

わが在京郷友最長老の一人、日本ホテル㈱会長（ステーションホテル）田誠さんが、四九年十二月十六日、東京聖路加国際病院で肝不全という病名で死去された。八三歳であった。

ありし日の田さん

田さんは大正年代に政界で活躍した健治郎男爵の二男、大正五年東大法学部を出て鉄道省に入り、同省の国際観光局長から華中鉄道副総裁を経て、戦後、現在の日本ホテル社長から四年前に会長に就任されたが、その後健康を害して、専ら静養に努められていた。先代が郷友会の会長をされ、田さんもまた顧問として本会のために協力されていただけに、ご逝去に対し、衷心より哀悼を表する次第である。

なお長男の敏夫氏は交通公社の旅行クラブ事務局主幹勤務。また次男英夫氏は、この前の参議院議員選挙で最高点で当選、国会で活躍中である。

＊

田さんの葬儀・告別式は同月十九日、東京四谷の聖イグナチオ教会で行われたが、生前の巾広い活躍振りを示す生花が各界から贈られ、会葬者も千名近くにのぼって田さんの死を悼んだ。

田さんは端正な顔にふさわしく、大変オシャレな人で「戦前戦後の国鉄マン中随一」だといわれていた。郷友会の会合にも、時おり出席されていたが、いつも姿勢をくずさず、話し方も静かで会員には親しみ深い好印象を残している。

田さんの功績といえば、昭和九年観光局長になってから、地方の観光地に外国人も宿泊できるような立派なホテルを建設する計画を建てて、大蔵省より補助金を出して地方に貸しつけ、赤倉、志賀高原、上高地、雲仙など十四ヵ所に国際観光ホテルを完成させたことで、現在も外貨の獲得、国際親善に大きく寄与している。

消息・お便り

（着順および配列順不同）

本格的な伝道へ

佐藤菊子（氷上・谷村）

実（43）昨年は健康のことで迷惑をかけたが、新しい年を迎えることができた。伝道所開設四周年の新年を迎え、これからが本格的な伝道の歩みなのだと思っている。

日曜学校や祈禱会が少しずつでも伸びてきているのは感謝であります。教会土地、建物が課題ですが、ともかく家族が健康でともに祈り、ともに奉仕できるのは恵みである。最近はオリエント学、旧約に興味を持っている。

菊子（41）教会奉仕をはじめ、子供の教育、夫の学習会の教師、「いづみ家庭文庫の会長？」その他父母の会などで相変らず多忙の日々を送っている。子供が成長するにつれ

て部屋も狭くなり、せめてもう一部屋と思うが、なかなか実現は困難。

義哉（9）小学三年、昨夏水泳五メートル泳いで待望の赤線一本を得る。野球も少しやるようになり、ヒットも打てるようになった様子。「教会のお兄さん」と近所の子供たちから優しさを買われる一面もある。たのもしい。

はんな（8）「トメット物語」を完成。いま「フロプシイ物語」その他の迷作童話集を書いている。図書館、児童館にいくのが毎週の行事。連日友達をつれて来て、仲よく遊んでいる。

えりさ（6）わがままま型。四月から一年生。文字を覚え、絵かきも上手。

× × ×

上山　顕氏（柏原・大新屋）さる四九年八月をもって古稀を迎えました。その前年十一月船員保険会会長を任期満了を機会に退任、会長勤務の生活に別れを告げました。しかし、労働・厚生・自治省などの十余りの審議会、審査会といったものには関係しております。

昔は趣味は乗馬とスキーでしたが、今は美術鑑賞ということにして、展覧会まわりに精を出しています。

（編集室追記・上山さんは多年の官界要職勤務の功労に依り、四九年一一月三日、勲二等瑞宝章を叙勲されました。なお本誌記事「地縁三代ばなし――江間時彦氏」の記事参照されたい）

藤本　久一氏（西脇市・鹿野）毎月歌誌に短歌を投稿するのが唯一の楽しみです。

余田　貞雄氏（市島・久良部）総会には是非出席したく思っておりましたところ、十月二十八日に家内が病気入院いたしまして重態となったため、小生も病院に泊り込んでおりますので、とうとう皆さまともお目にかかれなく、残念に思っております。

小谷先生の父君の哲氏、祖父田艇吉翁の書を五・六通持っておりますので、ご出席の皆様の話題にして頂こうと、総会にご持参する予定でありましたが、次の機会にゆずります。

蔦川　てる代さん（市島・竹田）郷土御出身の皆様ますますご健闘の様子、何よりとお喜び申し上げます。

春には長女の出産のお手伝い、秋には次女の結婚とわが家もおめでたが続き、とても忙がしい年でした。

上田　譲氏（春日・棚原）総会にはいつも出席したいと思っているのですが、運悪く何かとぶつかってしまいます。会費その他未納になっているはずですので、何かの方法でお支払いしたいと思っております。

井阪　いさおさん（山南・北太田）四五年二月脳溢血で倒れ、以来病床にあって、外出は出来かねています。

池田　種生氏（山南・小新屋）四九年四月、急病のため入院、手術の結果「肝膿症」とわかり、一時は意識不明となって生死の境をさまよっていましたが、以来入院三カ月半、退院後も医師の往診を受けております。全快までにはまだかなりの日数を要するかと存じます。

小寺　確郎氏（青垣・東芦田）たびたびご連絡を頂きながら、未だ一度も会合に出席の機を得ず、残念に思っております。今回の総会にも機を得ませんでした。郷友会の皆様の御健康とご繁栄を切に祈ります。

足立　源治氏（青垣・東芦田）丹波の皆様とお会いできるのは大変嬉しいことですが、残念ながら大阪で会合の先約があり、失礼します。一度是非出席の機を得たく、お世話下さる方々に厚く、御礼申しあげます。

足立　治氏（青垣・杉谷）塩気とアルコール分は大分抜けました。御蔭で元気です。

安藤　道子さん（柏原）始終何かとお世話さまになりまして厚くお礼申上げます。

足立　勲平氏（青垣）広島へ出張中。次回の総会には是非出席いたし度く――。

岡田　一雄氏（山南・畑内）震災のうわさ頻りなる折柄、老骨の都会生活は万事不適当と考え、近県の田園地帯へ逃れ去ろうと目下思案中です。

槌　玲子さん（春日・大路）毎度会合のご案内を頂きながら出席できず、申しわけなく思っております。次回には同級生の方々もお誘いいたしまして出席させて頂きたいと存じます。過日の柏陵同窓会の席上ですばらしい「山ざる」の会誌を頂きました。

（編集室＝是非同窓生の皆様をお誘い下さい。なおまた、会誌「山ざる」も同窓会の連絡その他にご利用下さるようお願いします）

足立　石蔵氏（春日・多田）紅葉おりなす秋もなかば、郷友の皆様の御活躍のことお喜び申し上げます。総会には会社の仕事の都合でまことに残念ですが、出席いたしかねます。

杉岡　明美さん（氷上・南油良）「山ざる」第四号に、私の趣味はコーラス、と書きましたところ、渋谷でコーラスの指導をしていらっしゃるという笹倉強様より早速お誘いの電話を頂きました。お目にかかったことはございませんが、同郷の方と伺っただけでなつかしく大変嬉しく存じました。

今は小供が小さくて時間的に無理ですが、そのうちにお仲間に入れて頂けるのを楽しみにしています。現在はＰＴＡコーラスの一年生として発声練習に励んでおります。

上田　要氏（代筆）（春日・棚原）老生・鳩杖の年を迎えまして、もうすっかり社会にご無沙汰をいたし引きこもっております。この会のますますのご発展をお祈りいたします。

土屋　タイさん（福知山）郷友会のために一方ならぬご尽力により、ますますご発展の様子を拝し、心からお喜びを申しあげますとともに、深く感謝しております。何分高齢のため、遠くへの外出は医師から止められておりますので悪しからず……。皆様によろしく。

常岡　幹彦氏（柏原・上小倉）いま丹波に来ております。丹波の山々も色づき始め、澄んだ秋の日ざしに美しく輝いています。松茸もそろそろ終りとか。四、五日写生をして帰

ります。旧友と一パイやるのが楽しみです。

小林　剛氏（市島・北奥）相かわらず元気です。余暇はもっぱら乗馬です。今年は武蔵野市の馬術大会の「B馬場馬術」で優勝しました。次回には「中障害飛越競技」の優勝をねらって精進を続けています。そのため、ゴルフ、スケートはいま練習不足で、特にゴルフは折角の案内にも参加できず残念です。そのうち、この方面もガンバリますからよろしくお願いします。

（別記記事参照）

瀬々　妙子さん（柏原）先輩諸姉に助けられて、さる十月十九日の柏陵同窓会の世話役を無事務め終えて、気落ちしています。いまさらにこんな大それたことを引受けたものと、あとになって知るうかつさ、赤面ものです。しかし世代世代の思い出は、非常に意義深いものを知りました。郷友会の皆様からも是非それを教わりたく存じます。

秋元多美子さん（旧姓佐野・氷上・成松）すだく虫の音にも秋の深まりを思わせます。妹の娘の結婚式に出かけて京都へ参ります。十月中ごろに実家の弟が、ふるさとの山で採れた松茸と栗を、出張のついでに持って来てくれまして、郷土の成松の思い出にふけり、娘時代に亡き父と松茸狩りに毎日を楽しく過したことをついこの間のようになつかしく偲びました。京都へいったついでに、また墓参に成松へ廻って来ようと思っています。

植木　伍鹿氏（山南・和田）最近、めっきり年をとったと自覚するようになり、会社関係も四九年九月をもって引退しました。現在もっぱら自宅で健康保持につとめております。夜分の外出は差し控えております。

土田　直吉氏（青垣）楽しみにしておりましたコンペも都合悪く、何回か私どもの協同組合東京つるやチェーンの行事と重なりまして欠席いたしましたが、許すかぎり参加させて頂きますので、お見捨てなく今後ともよろしく……。

荻野行雄氏夫人経子さん（春日・多田）小谷先生の御受賞、郷党の誇りとしお喜び申上げます。今年もまた「山ざる」にお目にかかれる頃になりました。編集部の皆様のお骨折で年々立派になって参り、よろこびと楽しみで一ぱいでございます。夫も床につきましてより二年半、病いのためもうろうとした頭の中にも故里は決して忘れることはなく、言葉にならぬながら私に語りかけ一ページ一ページ丁寧に拝見して喜んでおります。年を重ねるごとに、故里への思いは深くなって参ります。いまから「山ざる」の出るのを楽しみに待っております。

新入会員

足立　彊氏（小谷正巳氏紹介。青垣町出身）〒335蕨市中央三ノ二ノ七　つるや洋装店主　電〇四八四（31）五一七九

畑　雅樹氏（市島）〒240横浜市保土ケ谷区岩井町国鉄アパートB一二号、国鉄運転局車務課

畑　健氏（市島）〒187小平市鈴木町二ノ

一七七　小平アパート一—三、電々公社武蔵研究所管理室

高見久子さん（柏原）〒185国分寺市西町五一四—一　電〇四二五—七五—八六三五

横田　悟氏（山南・和田）千葉市千城台西一—三九—一四　電〇四七二—三七—四三六一

久保田元子さん（　）足立区綾瀬三—八—四〇—三〇五　電六二〇—四〇〇七

近藤　田治氏（春日・東中）（松山幸逸氏紹介）

転勤・住所変更

野村　虎男氏（柏原）前橋の関東製酪㈱に六年余勤務しましたが、四九年一月より明治乳業㈱本社に籍をおかれている。

西山　敬次郎氏（市島）大阪通産局長に栄転さる。

常岡　昭氏（柏原）四九年七月末日、日本鋼管病院を退職され、世田谷区桜新町一ノ一九ノ一四に眼科医院を開設された。なお住所は現在のままである。

江間　時彦氏　〒164東京都中野区中野五ノ一九ノ一中野ブロードウエイセンター九二八号室へ。アメリカン・ファミリー生命保険会社日本支社副社長に就任（本文参照）

足立　徹氏（青垣・東芦田）三菱商事㈱大阪支社長（二年余）勤務中のところ、四九年十一月二十八日付をもって本社常務取締役・非鉄金属本部長に栄転。

小田　明子さん（山南）東京都町田市玉川学園四ノ一六ノ八へ転居。

田辺　善人氏（柏原）東京都港区芝大門二ノ一三ノ四東京施工㈱へ。

門山　静子さん（氷上・成松）横須賀市久里浜三ノ一〇〇二へ。

足立　源治氏　横浜市から、練馬区豊玉北一ノ九江古田サニーハイツ六〇三へ転居。

訃報

（謹んで哀悼の意を表します）

園田　寛氏（柏原）四九年五月二十三日午前十時老衰のため死去された。享年九十歳。郷友中の最高年者であった。告別式は東京芝の増上寺に於て五月二十七日午後二時からとり行われた。

永井清司氏（山南）四九年八月二十日ご逝去、享年九十歳。

芦田六之助氏（春日・黒井）四九年三月八日ご逝去。

井垣郁子さん（青垣・栗巣野）四九年一〇月九日ご逝去。

梅垣作治郎氏（山南）四九年十二月一日老衰のため死去された。享年九〇歳。同氏は石橋治郎八会長時代、郷友会の世話を一手に引き受けて協力されて来て、会員一同から感謝されている。

ゴルフ同好会記録

四十九年度のゴルフ同好会は、年四回のコンペのうち、三回を小金井で、一回を袖ヶ浦で消化しました。いずれも名門中の名門コースです。特に小金井は交通の便も良く、伝統ある名コースです。一見やさしそうでいて難しく、なかなかスコアがまとまりません。何回行っても面白くあきない。こんなすばらしいコースでプレーできるのも郷友会コンペならではと思います。

郷友会コンペ

各コンペの優勝者は左記の通りです。

（足立正）

第十一回　三月二十二日　小金井　竹村政雄
第十二回　六月二十一日　小金井　谷垣正雄
第十三回　九月　十二日　袖ヶ浦　伴仲和子
第十四回　十二月　五日　小金井　宮木　転

囲碁同好会記録

囲碁同好会の四十九年度の成績は別表のとおりです。同年は会場が転々と変らなければならなかった事情もあって、開催回数、出席人員も不同で、盛況とはいえず、残念でした。愛好者は会員中には数十名おられるのだから奮って参加して頂いて、大いに楽しんで親交も深めてもらいたいと願っています。本年は会場を日本棋院（市ヶ谷駅前）に決めて開く予定でおります。

なお会員外の友人などもお誘い下すって結構ですから、多数御参加下されたく希望いたします。

（世話人―松山・足立）

昭和49年囲碁同好会成績表

会月	場日	勤労会館 2/16	右同 3/16	手談 4/20	杏林堂 6/2	棋院 10/12
林	谷	4—1—1△	3—4	2—4	4—1	—
荻	野	—	—	—	2—1	2—5
松	山	6—3	5—3	3—3	3—4	6—5
下	中	—	—	—	—	6—3
川	畑	1—4	—	3—1	—	5—2
小	林	3—5	2—2	1—3	6—2	3—5
高	見	2—2—1△	—	—	—	—
足	立	3—4	4—3	5—1	2—4	5—6
渡	辺	—	1—5	—	—	6—6
藤	岡	—	2—0	—	—	—
吉	竹	—	1—2	0—2	1—7	0—8
山	下	—	—	—	0—2	—
山	本	—	—	3—4	3—2	6—1
上	原	—	—	—	2—1	4—2
岩	井	—	—	3—1	—	—
小	川	—	—	—	5—4	—

数字は左勝・右負・△印引分です。

囲碁対局風景

柏陵同窓会開催さる

昭和四十九年十月十九日、渋谷ロゴスキーにおいて五十二名の出席を得て、午後一時三十分より三時間にわたりロシヤ料理を楽しみながら懐しい話の中に終了した。

会は前田氏の司会により開会され、有田支部長欠席のため梶浦副支部長より、今回の催しが松柏会のお世話によるものと感謝の意をこめて挨拶があり、上山副支部長、植村副支部長より経過報告等があった。後、最年長である生駒氏の音頭により乾杯し、懇談、会食に入った。自己紹介に華をさかせ、有田支部長の祝電等を披露するうちに、足立かをる幹事より閉会のことばがあって、近年にない多数の参加で盛会であった。(村上記)

同窓会出席者次の通り〔敬称略〕

〔男子の部〕生駒篤郎　梶浦浩二郎　東後一美　上山顕　小林武治　宇高直道　藤原岩市　谷垣博　小林剛　村上末吉　志村勝郎　藤田正雄　下中昭男　前田和市　児玉安正　池上亘泰　常岡幹彦　笹倉強　岩井要　中島義則　上嶋一晃　以上二十一名

〔女子の部〕野村千里　植村章子　藤尾ちゑ子　渡辺幸子　永井希代子　秋元多美子　安間喜代子　泉睿子　足立かをる　松下トシ　三浦セツ　中野周子　井手梅野　小糸イキ　横田洋子　沢田みさを　渡辺貴美子　千葉淳子　小田明子　井田悦子　長尾希美代　岸本昌子　安原和己　笹倉郁子　槌玲子　瀬々妙子　佐藤菊子　高尾久子　天野清子　久保田元子　池田和子

以上三一名　計五二名

表紙画家紹介▼常岡文亀画伯は明治三一年柏原町に生れ、東京美術学校日本画科を卒業、結城素明先生に師事、母校教授となる。その後文展審査員、大日本美術院同人、日展委嘱等日本画壇の重鎮として郷土出身画家の大御所である。帝展に「鶏頭花」及び「棕櫚」を出品、それぞれ特選「カンナ」は政府買上げの栄誉を受けた。さらにシンガポール総領事館をはじめ在外公館の作品を制作、世界的に知られる。なお画伯の長男幹彦氏も父君と共に日本画家として活躍している。

四九年度総会開く

昭和四十九年度関東氷上郷友会総会は、四十九年十一月八日午後五時三〇分より、文京区根津の「弥生会館」で開催。同年春、科学技術学界の最高の栄誉とされている「藤原科学賞」(別記参照)を授賞された、現東京理科大学学長小谷正雄理学博士の授賞対象となった研究の一端について約三十分に及ぶ学術講演を聞いたあと、議事に入った。

会務報告、決算(前田理事説明)を承認(別記)、ついで前田理事の会計担当辞退に伴う後任者に会長指名で小谷正巳氏を満場一致で推せん、懇親パーティに移った。

パーティでは有田喜一代議士の政界の近況、地元からわざわざ出席された町会議長、助役の各氏から近況報告などあって和気あいあい裡に杯を交しながら懇談、八時すぎ散会した。

なお出席者は左記三十名で、少なかったのは残念だった。

昭和四十九年度定時総会出席者(順不同)

有田喜一　足立三治　小谷正雄　渡辺金三　吉竹貞治　木村つた江　伴仲信次　前田和市　常岡幹彦　長富千代一　横山幸三　足立かをる　永井常資　野村虎男　足立誠一　須原清　上山顕　足立正　渡辺隆男　小谷正巳　土田直吉　小田晋作　永井輝江　光山秀子　堀川万次　植村章子　松山幸逸

地元氷上郡よりは春日町助役山田実氏、青垣町助役中尾氏、青垣町議長足立一郎氏の三氏が出席された。

財務担当に小谷氏

昭和四十九年度総会において、財務担当を辞退された前田和市理事の後任に、小谷正巳理事が選任された。

小谷理事は、村田簿記学校卒業、昭和九年八月つるや総本店入社、十七年既製服統制会社入社、二十二年神楽村営共同作業所長、二十六年逗子市に洋装店開店し、現在に至っている。関係事業にはつるや洋装店、東逗子駅前ビル、東海産業各会社などの代表取締役のほか、精力的な活動をされている温厚な人柄である。

五十年初の役員会

小谷正巳理事

昭和五十年最初の本会役員会は二月六日午後五時三十分より春日建設会議室で、有田、足立両会長、西川顕問ら二十名が出席して開かれた。席上「山ざる」第六号の制作状況、本年度の活動方針など話し合ったのち、有田名誉会長より、最近の政界の裏ばなしなどを聞いたり、なごやかな歓談を重ねて八時頃散会した。当日の出席者左の通り。

有田喜一、足立三治、西川政一、渡辺金三、山中一朗、伴仲信次、生駒篤郎、須原清、竹村政雄、谷垣正雄、常岡幹彦、木村つた江、小谷正巳、足立かをる、植村章子、足立正、松山幸逸の諸氏(順序不同)

関東氷上郷友会・昭和49年度会計報告

昭和48年10月1日～昭和49年9月30日　　会計　前田

収入の部			支出の部		
費目	摘要	金額	費目	摘要	金額
繰越金	振替貯金 130,657 現金 20,073	150,730	出版費	山ざる5号　出版諸掛	285,820
会費収入	延　172名	174,000	印刷通信費	封筒各種案内 山ざる発送費	53,480
広告収入	会誌山ざる5号広告料	212,000	雑費	丹波新聞広告代 10,000 諸雑費 7,630 振替手数料 4,310	21,940
総会収入	48.11.7 会費収入　21名 42,000	42,000	総会費用	48.11.7 当日会場費用 54,365 諸掛雑費 11,200	65,565
			役員会費用	2回分会費徴集　延　35名 39,000 〃　食事代諸掛 49,360	10,360
			繰越金	振替貯金 144,261 現金 27,304	171,565
寄付金	会長より	30,000			
収入の部　合計		608,730	支出の部　合計		608,730

会費領収報告

領収日時　昭和四十九年一月～十二月末日

四八・四九年度　生駒篤郎、伴仲信次、瀬口妙子、谷達雄、三浦セツ、山中秀雄、坂上勝朗、河津助治、高見安亮、志村勝郎、白滝勝康、杉岡明美、大西俊治、井本義一

四七・四八・四九年度　大木正徳

四九年度　藤田かね子、大地富美子、秋山一男、山本清、大沢まつ子、芦田坦、広瀬幸太郎、赤松たつ、三宅良夫、大野渥子、藤原信男、畑健、安田功、園田寛、斉藤俊一、林谷集、竹林すま子、吉竹貞治、藤尾ちゑ子、土屋タイ、天野清子、野村虎男、田誠、田敏夫、柿原庸、永井常資、安藤秀夫、婦木一男、久石幸太郎、上山顕、森田節子、三浦セツ、小野智恵子、石橋昭彦、林田孝子、荻野行雄、伴仲信次、奥谷松治、上田要、畑義博植木格、久保豊、足立一郎(青垣議会議長)、木村つた江、小林剛、足立士朗、勝野きしの、足立誠一、岸田勇、小寺確郎、小田利江、佐々木盛雄、平岩慎吾(青垣町長)、上嶋一晃、村上末吉、松本金吾、木寺昭三、菱田ふみ子、室井利代、音無太美子、有田毅、谷垣博、最上次郎、矢本博一、足立玉治、土田直吉、小谷正巳、足立守久、山本忠、足立要、古藤一、足立幸夫、渡辺隆男、渡辺貴美子、西垣秀正、春日町役場、菊地顕三、足立昌彦、吉住重造、村上大憲、柿原庸、宮城あい、大槻作治郎、佐藤菊子、安原和己、小糸イキ、安間喜代子、槌玲子、高尾久子、横田悟、池田和子、久保田元子、中島義則、井田悦子、土屋タイ、渡辺金三、渡辺幸子、吉竹貞治、植村章子、木村つたゑ、常岡幹彦、永井常資、須原清、光山秀子、小田晋作、野村虎男

四九・五十年度　野村利吉、野村千里、永井輝江、足立かおる、秋山一男

四八・四九・五十年度　上村愛子、片山日幹

五十年度　矢本博一、足立玉治、土田直吉、小谷正巳、近藤敏雄、足立守久、袴塚喬夫、山本忠、足立要、古藤一、足立幸夫、足立彊、竹村政雄、山中一朗、藤田かね子、大西俊治、植村章子、谷垣正雄、渡辺勉、渡辺久子、畑健、安田功、井本義一、近藤田治

不特定年度　恵本みよし(五〇〇〇)

本会役員(順序不同)

顧　問　荻野定一郎・生駒篤郎・西川政一・芦田秀雄・小谷正雄

名誉会長　有田喜一

会　長　足立三治

副会長　渡辺金三・伴仲信次・松山幸逸

監　事　竹村政雄・須原　清

理　事　上山　顕・横山幸三・永井常資・山中一郎・荻野英夫・村上末吉・前田和市・安達陽一・荻野　武・足立　正・小谷正巳・植村章子・足立誠一・木村つた江・常岡幹彦・高見嘉都司・田辺輝一郎・小林武治・野村利吉・長富千代一・村上大憲・足立かをる・林谷　集・足立治・谷垣正雄・渡辺隆男

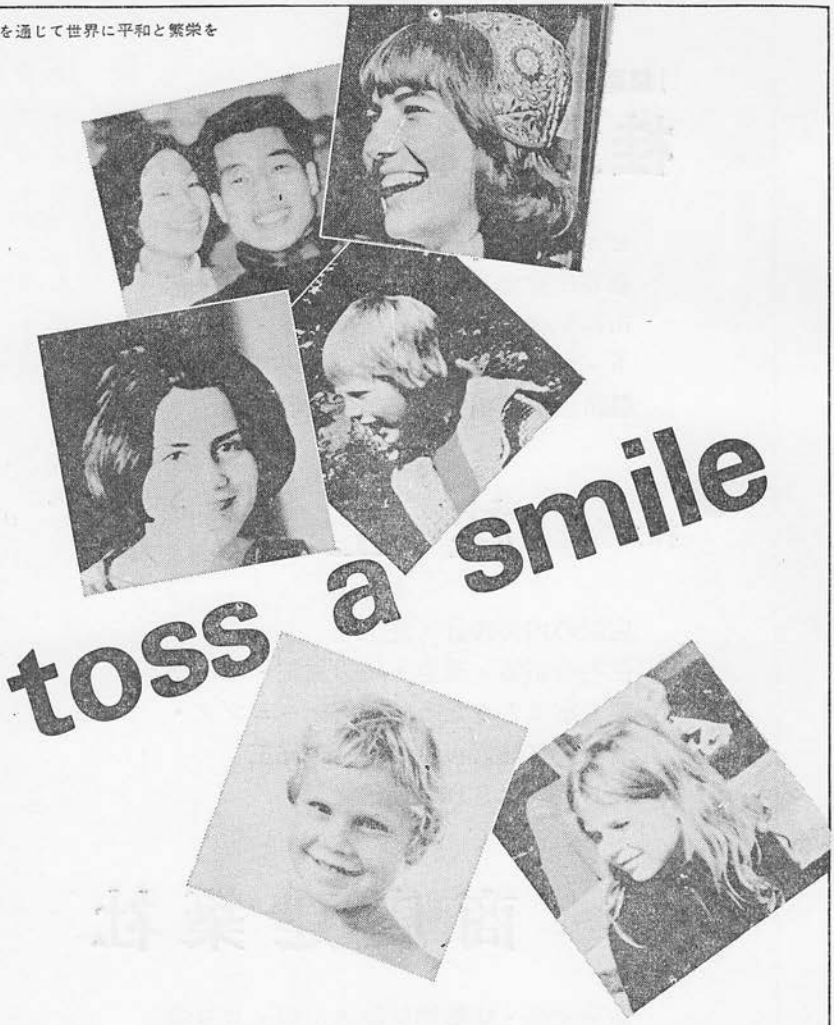
会費についてお願い

昭和五十年度会費　一〇〇〇円　会誌にはさんである振替用紙をご利用の上、ご送金方お願い申上げます。

財務担当理事　小谷正己

会員各位

貿易を通じて世界に平和と繁栄を



総合商社・日商岩井は、貿易を通じて世界に平和と繁栄を実現したいと考えています。そして、その国々の進歩に手をさしのべる開発事業や合弁事業、外国間貿易などに、ディベロッパーあるいはオルガナイザーとしてグローバルなスケールによる商社活動を展開しています。

未来へ創造する

総合商社
NI 日商岩井

東京本社……東京都港区赤坂2丁目4番5号
☎ダイヤル・イン・案内台(03)588-2111
大阪本社…大阪市東区今橋3-30☎大代表(06)202-1201
ネットワーク……国内40都市・海外100都市

●提供テレビ番組「土曜ワイド・スペシャル」
毎週土曜日PM2:00～PM3:25　MBS・NET他5局ネット

貿易界のエグゼクティブ・マンスリー
月刊〈トレードピア〉(日商岩井・発行)好評発売中！

1級建築士事務所

桂建築綜合研究所

ビル建築の設計・監理
事務所建築・賃貸ビル・商業ビル・都市再開発にともなう新築ビル・アパート・マンション・住宅…等の新築ビル
経済性を尊重した優美な設計

株式会社 **桂 工 務 店**

店舗の内装設計・施工
住宅の新築・改造・増設施工・都市美観工事にともなう街路・オーニング・看板・電飾看板等の設計・施工
システム化された近代経営

株式会社 **商 店 建 築 社**

商業建築・建築関係図書出版・月刊誌
商店建築・TAU発行・名作シリーズ・単行本写真シリーズ…等多数発行

春日町中山出身　村 上 末 吉

住所　東京都中野区東中野1—2—5　TEL 369—1834

建築材料販売工事

建設大臣登録(般) 48 第1834号

中央建材工業株式会社

取締役会長　荻　野　英　夫

取　締　役
東京営業所長　荻　野　　武

本　　社　名古屋市千種区若水町 3—26
電話 052 (761) 6181番(代表)

東京営業所　東京都中央区銀座 7 丁目14—3
電話 03 (543) 8106 番 (代表)

大阪営業所　大阪市西区靱本町 3 丁目48
電話 06 (443) 6665番

仙台営業所　仙台市宮町 1 丁目 1—22
電話 0222 (61) 8133番

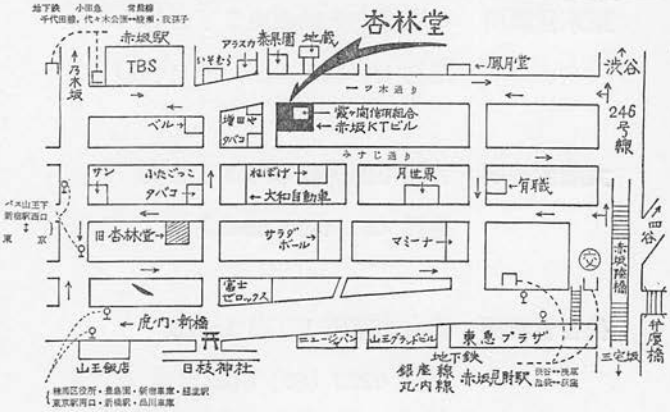
古典医学・脈診研究

鍼専門治療　**杏林堂**

小川晴通

東京都港区赤坂3—6—8
電　話（583）1553番

杏林堂診療室



診療時間の受付は前もって電話にてお約束いたします

衆議院議員

有田喜一

衆議院第一議員会館
電話（五八一）五一一一（代）内線三六二番
直通（五八一）四九四三番
東京都世田谷区成城四ノ一ノ一五
電話（四八三）一二〇九番
兵庫県氷上郡氷上町谷村
電話〇七九五八（二）〇〇〇八番

日本メキシコ協会会長
日本バレーボール協会会長
アジアバレーボール連盟名誉会長
国際バレーボール連盟副会長
日商岩井株式会社相談役

西川政一

（住）東京都杉並区善福寺二ノ三五ノ一六
電話（三九〇）一三一六番
（寓）静岡県伊豆高原
電話〇五五七―五三―二五六〇番

藤原アジア研究所所長

藤　原　岩　市

東京都港区浜松町1—5—7山の手ビル2F

電話 03（437）5693～4番

調布市社会福祉協議会理事
調布市豊かな老後のための市民会議実行委員
老人問題研究所

木村　つた江

東京都調布市東つつじヶ丘2—39—5

電話 東京（300）1505番

株式会社　つるや洋装店

株式会社　東逗子駅前ビル

東　海　産　商　株式会社

代表取締役　小　谷　正　己

逗子市逗子 1—6—4

電話　0468. 71. 3075

71. 6449

婦人生活目黒学園

（目黒ターミナルビル内）

日本テレビ綜合タレント学院

日本舞踊教授

西　崎　祥

東京都品川区小山四の九の三

電話（七七一）八六〇三

祝賀会御宴会などの芸能承ります

郷友会のお子さんたちもどうぞ！

電子器機部品専門商社

株式会社　三　誠

取締役社長　足立誠一

東京都千代田区外神田3—2—13

電　話（255）1251番（代表）

綜合建設業

東京都知事登録第3号

春日建設株式会社

代表取締役　伴仲信次

（春日部出身）

東京都千代田区飯田橋2丁目9番3号

電話東京（264）4011番（代表）

株式会社 近藤写真製版所

取締役会長 近 藤 林 蔵

取締役社長 近 藤 勇 夫

（国領出身）

東京都新宿区下宮比町8番地

電 話（260）6281番（代表）

デラックスムードの

ホテル 春 日

京成谷津駅前（谷津遊園入口）

八弘産業株式会社

代表取締役 長富千代一

千葉県習志野市谷津町 2 丁目332—3号

電話 0474（75）7471番

照明ガラス・建材ガラス
食卓用ガラス器

島田特殊硝子株式会社

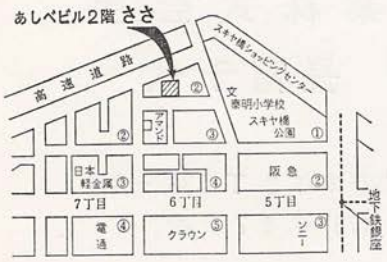
取締役社長　栗原重次（国領出身）

東京都港区新橋３丁目22番２号
電話 03（433）6151番（大代表）

関西風山菜料理

さ　さ

小　山　元　和（篠山出身）



東京都中央区銀座６—２—７
あしべビル２階
電　話（571）４４２３番

報国水産株式会社

取締役社長　小　寺　確　郎

東京都中央区築地7丁目9—13

電　話　03（541）1731番（代）

会誌『山ざる』
囲碁同好会　御用承ります

松　山　幸　逸
（春日町国領出身）

連絡先　東京・赤坂・ＴＢＳ会館内キョーエー
電話（582）7351　内線 5192
自　宅　東京都豊島区西池袋4—8—8
電話（971）5743

芦田秀雄

東京都杉並区下井草四丁目二一―三
電話（三九〇）二八六六番

三菱商事株式会社
常務取締役
非鉄金属本部長
足立徹

千代田区丸の内二―六―三

明治生命保険相互会社
本社　東京営業センター
足立正

東京都千代田区丸の内二丁目一番一号
電話（二一六）直通六五七九・九五一九

植木紙工所
代表者
植木一夫

東京都文京区白山三丁目一～十三
電話（八一一）八五七三番

荻野定一郎

事務所　東京都千代田区丸ノ内二ノ二
（丸ビル六階六二五区）
電話（二一一）七〇六一～二番
自宅　鎌倉市御成町十七―十四
電話〇四六七―二二―六七四二番

木徳証券株式会社
畑秀夫

本社　東京都中央区日本橋兜町一丁目八番地
電話東京（六六六）一四八一（代表）～一四八九番

日本学士院会員
東京理科大学学長
理学博士
小谷正雄
東京都新宿区神楽坂一ノ三
電話東京(二六〇)四二七一代表
自宅 東京都大田区山王三ノ三六ノ四
電話東京(七七一)六六五二

景山正吾
156世田谷区桜一—二〇—七
電話 〇三—四二九—五八八〇

高見歯科
高見幸男
〒176 練馬区錦町二—八—三
電話 九〇〇—三八五六番

須原清
東京都中野区南台五の三〇の六
電話(三八一)一六二一番

高見産婦人科
医学博士
高見嘉都司
東京都板橋区熊野町四〇番地
電話(九五六)〇六〇〇番

谷垣正雄
東京都杉並区高井戸西一—二四—一七
電話(三三三)六一六〇番

株式会社興水タイヤ商会
経理部長 三宅良夫
川崎市川崎区元木一丁目一番一号
電話 〇四四（233）六三二一番（代表）
二八八四・二八六一番

日本ビクター株式会社
専務取締役 西垣秀正
東京都中央区日本橋本町四丁目一番地ノ一
電話東京（〇三）（241）七八一一番（大代表）

木徳証券株式会社
投資顧問 能勢次郎
東京都中央区日本橋兜町一ノ八
電話東京（666）一四八一（代表）
自宅 千葉市穴川二ノ三ノ六
電話〇四七二（五一）三七八二番

曹禅寺住職
村上大憲
東京都大田区池上七丁目二二番十号
電話 〇三―七五一―二〇三五番

横山産業株式会社
取締役社長 横山幸三
東京都江戸川区中央二―三四―六
電話（六五五）三九九一 代表

ノーブル印・スター印製造発売元
事務服・制服・作業服・繊維産業資材
園児服・園児用品・金属遊具・形象遊具
ノーブルスター株式会社
取締役社長 吉住重造
本社 東京都千代田神田須田町一ノ十一
電話〇三（二五三）三四九三（代表）～五番

あとがき

▲さて本号だが、お蔭をもってご覧の通りの珍しい顔の、しかも読みごたえのある原稿が沢山寄せられ、増ページして皆様に届けることになり、編集者の一人としてまことに嬉しい限りである。毎号表紙画を贈られている常岡文亀画伯に対する感謝とともに本号の寄稿家の皆さんに厚くお礼を申し述べたい。

▲本号には田誠さん、深尾須磨子女史、本会の運営のために献心的に尽して頂いていた梅垣作太郎さん、園田寛さんら郷友会の先輩、長老の方々の訃報を載せざるを得なかった。会者常離、生者必滅は生あるものの宿命とはいえ、悲しいことである。

誌面を通じて謹んで御冥福を祈りあぐ。

▲石油危機以来、高物価、インフレの波は止まる様子は見られない。会員の皆様の生活なり、事業経営にもそれぞれ影響を与えて、御苦労なさっていることとお察ししている。同様の事態は郷友会の運営にも響いて来て、本誌の発行も並々ならぬものがある。しかし、ここで挫折するようでは、先輩諸氏が築いてくれた努力や熱意に対しても相済まない。どうか、皆様のご協力におすがりして、共に手を携えて愛郷のともしびを照らし続けたいと思う。

▲わたくし事を申し述べて恐縮であるが

年明けて婦唱夫随の五十年

七十五歳ともなると、体力的にもいささか衰えを覚えて来た。だが、まだ酒量も衰えないし、碁を打っても負け越しも少ないようだから、お手伝いさせて貰える積りでいる。よろしくお願いしたい。

（竹水）

ご寄稿を歓迎します

随想・随感、身辺雑記、ご意見やご提案、ニュース、お便り、写真など、どんなものでも結構です。郷友会の交流を暖めるために、ぜひお気軽な皆様のご投稿を、お待ちしております。書式も文体も、特に定めませんので、折にふれて事務所宛ご投函いただければ幸甚です。

なお次号の発行は五一年三月の予定で締切りは本年十二月二〇日です。（松山）

山ざる　第六号

昭和五〇年四月一五日印刷
昭和五〇年四月二五日発行

編集委員
松山幸逸　足立　正
荻野　武　常岡幹彦
渡辺隆男　前田和市

発行所
関東氷上郷友会
東京都千代田区飯田橋二丁目九番三号
春日建設株式会社内　〒102
TEL東京〇三（264）四〇一一番（代）
振替貯金番号　東京　一一三一一三〇番
制作　株式会社　二玄社

画期的！経費処分の出来る

大型経営者保険誕生

わずかな掛金で**500万円**から**3億円**まで

日本で始めて**ＡＩＵ**と**大同生命**が提携

○非常に安い掛金で、しかも全額経費処分が出来ます。

○一度の診査で、10年契約。65才まで加入出来ます。

○掛捨ですから通貨不安、物価変動に強い新時代の保険です。

○経営者に病気・災害・天災の事故のあった時、企業をがっちり守ります。

○その家族にも高額の退職慰労金が保償されます。

○役員の任期も考えると、この保険は理想的な保険です。

一例Ｄ型

死亡	事故による時		5000万円
	病気による時		2500万円
休業補償	事故	入院の時	1日につき 7500円
		入院しない時	〃 2500円
	病気入院（20日以上）		〃 2500円
傷害医療費50万円迄　病気手術　5万円			
傷害の程度により病気廃疾の保険金			

年令	保険料（Ｄ型）
35才	月払　17,137円
40才	〃　19,637円
45才	〃　23,887円
50才	〃　30,387円

ご説明に伺いました際は粗品を進呈させて戴きます。

ＡＩＵ総合代理店
大同生命代理店

永愛友商事（株）

〒107 東京都港区赤坂３－１－２ＡＩＵ赤坂ビル
TEL 03(585) 0740代　代表者　前田和市

GRUE BONNE 高級婦人服製造卸

つるや産業株式会社

取締役社長 足 立 三 治

東 京 店　品川区西五反田 7—22—17番地
東京卸売りセンター12階
電 話　(03) 494局3285～7番

本　社　川崎市新丸子 7 0 1 番地
電 話　(044) 722局6371 (代表)
社長室直通 722局3212

創業 昭和9年

主なる取引先

(株)東急百貨店 (本店, 東横店, 日本橋店)
(株)伊勢丹(本店, 立川店, 八王子店, 吉祥寺店)
(株)大　丸(東京店, 町田店, 大阪店, 神戸店, 京都店)
(株)西武百貨店(本店, 渋谷店) (株)松 屋(本店, 横浜店)
(株)野沢屋 (株)小美屋 (株)丸　井 (株)横浜岡田屋
(株)横浜高島屋 (株)川崎さいかや (株)阪急百貨店

通常料金加入者負担 払込

払込通知票

口座番号	※ 東京	十	万	千	百	十	番
		1	2	3	1	3	0
加入者名	※ 関東氷上郷友会						
金額	億	千	百	十	万	千	百	十	円
	※								
払込人住所氏名	※（郵便番号　　）								
備考		受付局日附印							

（郵政省）

文字は正確明りように、数字はアラビア数字を使ってお書きください。

各票の※印欄は、払込人において記載してください。

通常料金加入者負担 払込

払込票

口座番号	※ 東京	十	万	千	百	十	番
		1	2	3	1	3	0
加入者名	※ 関東氷上郷友会						
金額	億	千	百	十	万	千	百	十	円
	※								
払込人住所氏名	※								
料金	払込み	特殊 円	受付局日附印						
備考									

（郵政省）

記載事項を訂正した場合は、その箇所に証印してください。

各票の記載事項にまちがいのないことをお確かめください。

関東氷上郷友会・会費のご送金をお願い致します

1ヵ年分会費：1,000円

賛助広告料：

この会費は会誌『山ざる』の製作費と送料，および会の通信費等にあてられます。

どうかご協力をお願い致します

この欄は、加入者あての通信にお使いください。

通　信　欄

会誌“山ざる”制作の参考に供したく，下記について御意見承りたし。書き切れない場合は別便でどうぞ。

① 第6号について総括的なご感想

② 第6号中よかった記事3，4篇をあげて下さい。

③ 会誌をお送りしたい方があればご紹介下さい。関東以外，氷上郡内でも結構です。